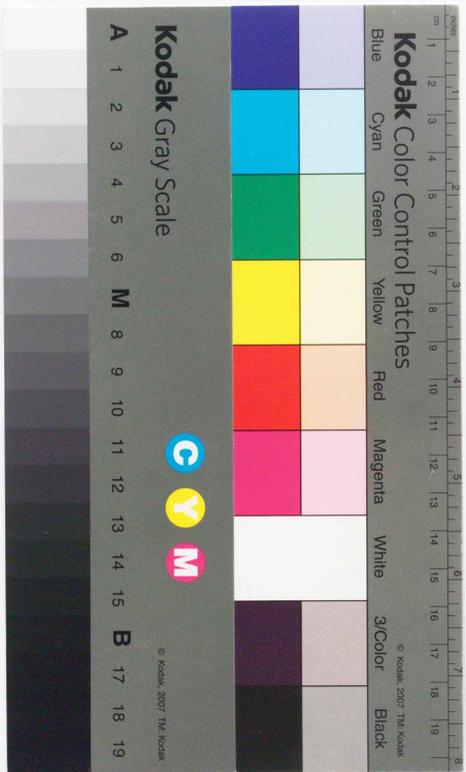


# 川島の植物



平成元年8月  
川島町ふるさと史料館  
調査員●佐藤徳次



---

・題 字

町長 野 田 知 澄

・表紙写真

笠田東の河原に群生する「オオキンケイギク」  
(キク科)。北アメリカ原産の多年草。もと栽培されたものが広く野生化した。川島でもここ  
2～3年特に目に付くようになった。

〈平成元年5月27日撮影〉

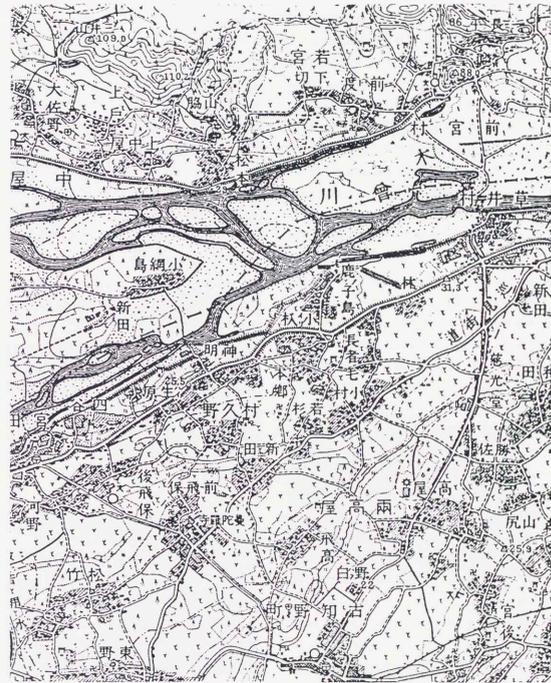
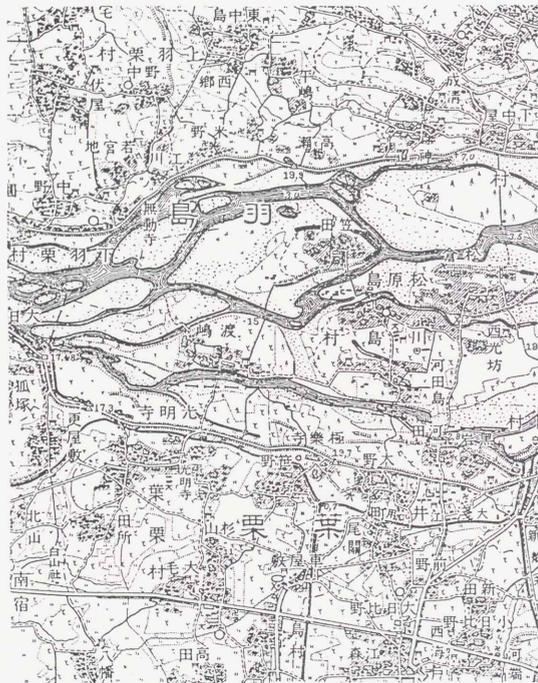
---

## 目 次

1. はじめに	4
2. 1988年度調査日程と概要	5
3. 川島町自生植物目録	10
4. ヤナギ類	13
5. ヤナギ以外の落葉樹	19
6. 常 緑 樹	26
7. 帰化植物	28
8. 水生植物	36
9. 在来の子葉草本	40
10. 在来の子葉草本	47
11. シダ植物	54
12. 自然保護	55
13. おわりに	60
調査員(執筆者)紹介	61
あとがき	62

大正末期から昭和初期の川島町附近

(陸地測量部 5 万分の 1 地図による)

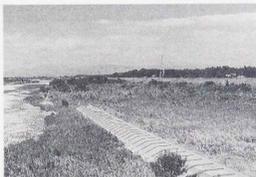


## 1. はじめに

川島町は岐阜県草薙島町の東端に位置し、北西は笠松町に北東は各務原市に隣接する。南は愛知県一宮市に東は江南市に接する。木曾川は大山市で山間部から濃尾平野に流れ出るが、その大きな中州に町全体が存在する。河川改修の結果木曾川が本流と南北両派川に分流し、本流と南派川の間に、小瀬、竹早、松倉、河田、松原、渡、北山の各町の集落があり、本流と北派川との間には笠田町の集落がある。町の東西は約6km、南北約2km、面積は約8.0km<sup>2</sup>あり、木曾川のいわゆる川中島であるから全城が砂土から成る。

町内の自生植物は建造物のない木曾川本流と南北両派川の川原に多い。町内はかつて山林が多かったが、エーザイの工場等が出たり宅地開発が進んで段々少なくなった。それでも近隣の市町村に比べれば自然が残っている町である。しかし自生植物は濃尾平野のごく普通のものばかりで、特別珍しいものは見られない。また水田がないので他の市町村に比べて水田や休耕田の植物がほとんどない。ところが野鳥は多くその宝庫といわれ、特に珍鳥コウライアイサシの発見以来有名になり全国から愛好家が訪れてはいる。気候は夏は蒸し暑く、冬は北西の季節風が強くて寒く、平均気温は14.6℃、年間降水量は1800mmである。植物にとっては冬の季節風による低温乾燥は不適で、特にシタ類の生育には不向きでその種類数はごく僅かである。川島町に限らず濃尾平野の各地では、冷たい伊吹風を少しでも避ける為に屋敷林と称して住宅の北・西側に常緑樹を何本も植えている。昭和初年の5万分の1の地図を見ると、当時の川島附近は現在の三派川に改修される前、木曾川が網目状に分流していた。幾度かの洪水

によって住民は大変な苦勞をし、生命や財産を脅かされて来たことであろう。それに橋がなくて周辺から町内に入るには、渡船だけが唯一の交通機関であった。その頃は網目の細い流れや、わんど(本流から川原に向けて湾状に入りこんだ水溜り)等には水生植物が豊富にあり、山林には貴重植物も多く自生していたであろう。例えば町役場の南(いこいの広場)にはエビネ自生地として保護されているが、これも過去には多くあったものと思われる。それが改修が進んで本流と南北両派川になり、橋も4か所出で便利になった。人命や財産を守るのが第一でありまた豊かな生活を求める為に、自然が破壊されることはある程度は止むを得ない。しかし人間の英知で出きるだけ自然破壊を最小限度にして護岸工事等をして貰いたいものである。



河田橋から見た南派川川原



松倉町の木曾川川原

## 2. 1988年度調査日程と概要

1988年4月2日 渡橋→南派川川原→河田橋→エーザイの南の川原

川原とその近くの雑木林を歩く。まだ一面の冬枯れであるが、所々で春の息吹を感じる。



南派川のアカメヤナギ

例えばヤナギの花は今が盛りで、渡橋の下にはイヌコリヤナギ、ネコヤナギ、ナガバカワヤナギの小群落があり、それぞれの雄花雄花を観察する。枯草の中で特に目立って黄色に見えるのはその高いゴメヤナギであり、これは花期が少し遅くまだ蕾である。堤防のコンクリートの隙間には、アレチハナガサ、メドハギ、ノイバラ、アレチマツオイグサ、セイタカアワダチソウ、アキノエノコログサ等が生えている。ほんの僅かの土があるだけなのに、よくも生育するものと雑草雑木の強さに感心する。堤防に接した雑木林やそれが一部照葉樹林に変わりつつある所を見る。最高木は落葉樹のアベマキ、ムクノキが多く、その下にアラカン、シラカシ、ヒサカキ等の常緑樹がある。林床にはアオキ、チャノキ、メダケ等が多い。サネカズラ、ツタ、スイカズラ、カラスウリ等植物が多くはいて選っていた。

1988年5月1日 河田橋→南派川川原→小瀬橋→町東端→木曾川本流川原→松倉町

春の盛りで前回より自然界の動きが活発になった。一年中で最も良い気候で、草木を観察しつつ川原を歩くのは実に楽しい。この前花盛りだったヤナギはもう種子が出て、白いむゆる柳じまが飛んでいる。川原に最も多いアカメヤナギは花期が一番遅いので今が花の盛りである。5月はスゲの花が見られ、特にアゼスゲが多い。シラスゲやアゼナルコスゲも見た。川原には小さなわんどがあり、その周辺の植物を記録する。水量が増加すれば水の中に没してしまう不安定な環境でもとても、多くの雑草が強く生きている。前回のコンクリートの隙間の雑草と同様、われわれ人間にあらゆる困難にうち勝って強く生きてよと教えてくれるような気がする。川原にヤナギタデの芽生えが再び咬むと辛い。植物を見分ける時、眼鼻だけでなく味覚を利用してタデの種類を知る。この辺には婦人植物が多く、これも母国を離れて異国の土地でたくましく生きている。特にマツバランソウの青い小さな花が目立つ。本流の川原で、ヤナギ群落、カワラモキ群落、カラスノエンドウ群落等を調べた。



渡橋下の南派川川原

1988年5月29日 渡橋→南派川川原→町西端→本流川原→川島大橋

渡橋から川原へおると、センダンの花が最初目に付く。どこにもある樹だがその割に

美しい。下は帰化植物で一杯で、イヌムギ、ホムソギ、ハナスカスキ、ツボミオオボコ、キョウソウ、シナダレスズメガヤ、マツバラン等、数えあげればきかない。渡橋の下でミゾコウジュの花を見た。この付近では珍しい植物である。都会の騒音を離れまわりではウグイスが胸き実の良い環境である。前回から1か月近くたち花期の遅かったアカメヤナギも抽じの時期となった。町西端の一宮市大日との境附近は魚釣の人が多い。ジブヤオートバイで南派川の浅い流れを渡って来る若者もいる。建設者によってつくられたイタセンバラ造殖池へ行き、その周囲や水中の植生を見る。大日との境附近は一面のヤナギ群落で大きく成長したコゴメヤナギが点々と自生する。川原のヤナギが各所で採査されているが、ここは立派な群落になっているので是非保護してほしい。運動場を通じて木曾川本流左岸へ進む。途中道端に帰化したイタチハギの花が目立つ。クロバナエンジュの別名通り紫黒色のマメの花は他にあまり例がない。木曾川に多いカワラハノキも、川島町内では少なくともこの付近で少数見ただけである。本流ぞいのクロマツ林、アキニレ群落、オニグルミ群落を調べる。川島町民会館前から対岸の笠田町を見ると、一面黄色の花が見える。瘦れともう後生元気がないので、何の花が気になったが後日に残した。(帰化したオオキンケイギクであった。)

**1988年7月3日** 川島大橋→笠田町→木曾川原→北派川川原→川島大橋→町役場附近  
木曾川右岸ではアカメガシワやネムノキの花盛りであり、各所でオニグルミが果実を着けている。この大きな果実は食用になるが、皮がむきにくく剥抜きが大変なので誰も採る人はいない。イヌドクサがコンクリートの隙間に群生する。川原にはクズがはい廻りアレチハナガサの

大群落が見られる。笠田町西部には草地里に、ヤマアワ、アオカモジグサ、イヌビエ、チガヤ、イヌムギ等、イネ科の雑草が多く、一部湿った所にはガマがソーセージの様な穂を着けている。北派川左岸の道端にはシシジユの巨木があり、ムクノキやニセアカシアの群落が見られる。笠田町北の運動場附近にはコゴメヤナギの巨木が点々とあり、ラン科のモズリの花を見た。



エビソル(左)とノドウ(右)

**1988年7月27日** 松倉町→木曾川川原→町東端→小網橋→エーザイ工場附近  
ブトウ科のつる植物ノドウとエビソルが堤防斜面に多い。両者はよく見ると花序の形も葉の裏も異なりその比較をする。松倉町の中州にヤナギ群落があるが、水量が多く渡ることが出ない。このあたりは水の流れが急である。岸にはオニグルミやナガバカワヤナギが多い。町東端に近い所にカワラサイコの群落がある。酒造学校の裏にはアカマツの幼樹が多い。南派川右岸にはアメリカナシカズラがラーメンを捨てた様に他の植物に寄生している。エーザイ工場の前の水路でエビモやセキショウモ等を見た。汚い小川だが町内で数少ない水生植物自生地である。

**1988年8月11日** 渡橋→渡町→河田町→三ツ屋池→梓下池→松倉町

今まで川原を中心に歩いたが、本日は町内の天然記念物と保護樹を中心に神社等を見て歩く。それぞれの樹木については別項で扱うので、ここでは訪れた神社のうち比較的自然の残る所について見てみよう。河田町の八幡神社はクスノキの巨木が多く、アラカシ、サカキ、イチョウ、モッコク、サルズベリ等がある。林床にはシオデ、ノドウ、ノダフジ、テイカカズラ、サネカズラ、カラスウリ等のつる植物がはい廻っている。下草はジャノヒゲ、ヤブラン、チヂミザサ、チゴユリ等の単子葉類と、エノキグサ、ミズヒキ、ムラサキカタバミ、フキ等の双子葉類が見られる。シダ植物ではノキシノブ、イヌワラビ、ヒメワラビ、ベニシダ等が目についた。松倉町の神明神社(小島のお宮)は境内広く、エドヒガの保護樹が東側にある。本殿の東側と西側に僅かの照葉樹林が残っている。アラカシ、ヤブツバキ、サカキ、エノキ、ムクノキ、ハゼノキ、サネカズラ等が林内に見られた。



河田町八幡神社

**1988年9月18日** 渡橋→木曾川本流川原→川島大橋→笠田町

スキの穂が出てハギの花が満開で、野原は秋の花で一杯である。川原ではツリガネニンジン、クサギ、ノコンギク、イタドリ、ツルシロ

等の花が見られ、またやや珍しいナンテンハギもごく僅かあった。帰化つる植物のアレチウリが特徴ある花と果実を着けている。全く嫌なものが侵入し傍若無人という言葉通りに各地でのさばっている。草木の上どこもアレチウリ、クズ、カラスウリ等のつるでおおわれてしまっている。笠田町北の運動場周辺は特に帰化植物が多く、オオキンケイギク、シナダレスズメガヤ、オオオナモミ、イガオナモミ、ブタクサ、オオフタバムグラ等数えきれない程である。笠田町の民家附近の道端にはオオブタクサが帰化侵入し、まるで樹の様に成長していた。

**1988年10月9日** 河田橋→南派川川原→渡橋→町西端

秋本番で川原や堤防ぞいの雑木林で果実がよくなる目立つ。アベマキ・シラカシ・アラカシのどんぐり、アキニレの扁平な実、ゴンズイの赤い実、マユミの四角形の実、サネカズラの赤い実、



キダチコンギク

ムクロジの実、オニグルミの大きな実、エゴノキの実、ムラサキシキブの紫色の実等がある。草ではツルマメの大豆に似た実、クズの実、カラスウリの赤い実、イシミカワの実等各地で目につく。川原一帯はオキギの銀白色の穂とセイトカアワダチソウの黄色花の連続である。所々キダチコンギクの白花が点々とあり、これは花がやや小さいが觀賞用に植えてある所もある。堤

筋斜面には名古屋市を中心にして広がったといわれるメリケンカルカヤの大群落がある。大日との境のイタセンバラ造殖地の周囲は、コブナグサ、クサキビ、オオオナノミ、アメリカセンダングサ、キダチコンギク等が猛繁殖し、水中にはコカナダモが多く見られた。同じ場所でも5月29日に来た時と随分違い、季節を変えて何度も調査せねばならぬことを感じた。



フェンスに巻きつくヒメクス

1988年11月6日 河田町→小網町→町東端→少林寺山→松倉町

この頃寒い日が続いているが、今日は小春日和で暖く町内を歩いていても気持ちよい。空地はどこもセイタカアワダチソウの黄色一色だが、所によってはキダチコンギクの白花も混っている。エーザイ工場のフェンスには、アマチャヅル、カミエビ、ヒメクス、ヘクソカズラ、スイカズラ、カラスウリ等のつる植物が巻きついている。小網町の神明神社（西小網のお宮）に寄る。社の東側には雑木林があり、アラカシ、サカキ、ヤブツバキ、エノキ、ムクノキ、ヤマウコバネ、ゴズイ、エゴノキ等の樹木がある。樹の幹や枝にはテイカカズラが一林巻きついている。総合スポーツ公園東の空地はメリケンカルカヤの大群落となっている。附近の道端の湿った所には、水田雑草のアゼナ、イヌビエ、タマガヤツリ、タネツケバナが生えている。川島町

には水田がないので、他市町ではごく普通のもので多くは少なくよく目につく。少林寺山にはクロマツがあり、幹に最近少なくなった地衣類のウメノキゴケが着いている。大気の再染と乾燥で生育出にくくなったといわれるが、ここではまだ健在である。その他コナラやアヤマキが多く、ハゼノキの紅葉が美しい。帰りに松倉町神明神社（小島のお宮）に寄る。8月11日にも来たが、この照葉樹林が町内では一番良い。ヤブツバキが多数あるのが特に目についた。

1988年12月11日 渡橋→木曾川本流川原→川島

大橋→笠田町→町役場附近

12月になれば野外はもう一面の枯れ草ばかりで、草本は冬ごもりに入っている。渡橋附近のシンジュは葉を落し置のある果実だけが残っている。タカオモミジは紅葉した葉がまだ着いている。神明社を過ぎるとツルウメドモキがソメイヨシノにからみつき美しい果実が目立つ。畑では丁度戸口大根の収穫中でテレビでも報道された。本流左岸の川原も茶褐色の冬枯れ一色だが、中には緑の葉を着けているものもある。ヤナギは一般に落葉が遅く、アカメヤナギやナガバカヤナギは半分位は葉が着いている。草では、オオガヤツリ、ウシハコベ、セニンソウ、イグサ、オヘビイチゴ、アキノノゲシ等がまだ緑葉のままである。堤防道路端にはコナラが黄葉して枝に残るが、ブナ科の落葉樹には冬中葉を着いたままで春になって落葉する性質がある。川原のエノキやオニグルミには多量のつる植物がからみ着いている。すなわちズクは幹に接着し、アケビ、サネカズラ、ヘクソカズラ、カミエビ、カラスウリ、クス等は樹全体をおおっている。笠田町に入り西部や北部の雑木林を歩くと、落葉期には常緑のヤドリギは見つけやすいので、上ばかり歩いて歩いたが見えたらない。

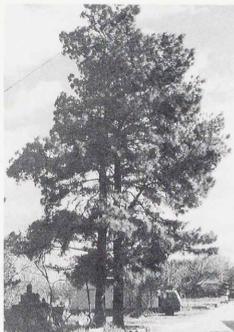
笠松町競馬場附近からトンボ池周辺にかけて見ており、山本保雄氏の記録にも川島町内にあるとされているので探したが見つからなかった。

1989年1月4日 小網橋→小網町→少林寺山→消防学校→南派川川原→河田橋

北風が強いが日照があって冬としては寒さも左程苦にならない。総合スポーツ公園に植えられた樹々も落葉樹は枝だけの寂しい状態で、植物にとって環境条件の最も悪い冬をじっと耐えしのんでいる。中でクスギだけはブナ科の特徴で昨年の枯葉を着けている。常緑樹はマテバシイ、トベラ、ヤブツバキ、クスノキ、クロガネモチ、スダジイ等が植えてあり緑の少ない今、鮮緑色がよく目立つ。マテバシイの下で長く大きなどんぐりを拾う。小網町の竹林の下ではアラカシ、サネカズラ、アオキ、マンリウ等の常緑樹があり、下にヤブツツやベニシダがあった。少林寺山のクロマツ林の下では、カラライソの緑葉やカワラヨモギの緑白の葉が目につく。消防学校の南から南派川の川原へ入るが、今は川に全く水がなく対岸の江南へ陸続きとなる。川原一帯は茶褐色の冬枯れで実に殺風景である。どこも枯れすすきと一面メリケンカルカヤばかりが続く。ヤナギも一般に落葉が遅く、ナガバカヤナギ、ネコヤナギ、イヌコリヤナギに僅かだが葉が着いている。ネコヤナギは開花が早いので、もう蕾（いひゆるネコ）が大きくなっている。冬枯れ中に緑が見えたのは、カラマツバ、カワラヨモギ、カラライソ、イグサ、カラスノエンドウ、オヘビイチゴ等であった。夏の間川原をはい廻ったクスは果実だけが寂しく残っている。

1989年2月26日 松倉町川原→松倉町神明神社→三ツ屋池→松原町神明神社→役場→エーザイ工園西

本年は暖冬で2月は雨が多く、2日続きの雨



墓地のチゲマツ

天で川は増水し川原が歩けない。松倉町の川原にクスギが1株ありまだ昨年の枯葉を一杯着けている。この附近にクスギは種であり本来の自生ではないようで、栽培されたものかどんぐりが発芽成長したものかもしれない。北風は強いが寒さはあまり感じない。松倉町秋葉神社へ行く。ツブラジイ、ヤブニッケイ、クロガネモチの葉が雨に洗われて緑が鮮やかである。次に東側の神明神社に寄る。広い境内の入口右側に北米原産のチゲマツが2本あるので、誰が植えたのか尋ねる。小島安治氏が移植したと教えられ、ご自宅を訪れる。江南市古知野で苗を購入された成長が早いので、もう蕾（いひゆるネコ）ふるさと史料館東の墓地に2本植えてある。三ツ屋池は冬枯れで寂しく、オオオナノミの昨年の果実が目についた程度である。松原町神明神社附近はウメが多く栽培され花盛りで美しい。松原町の数除でアイヌカイノデナキリスグを見る。樹上にサネカズラがはい上がり果実が少数だが残っている。エーザイ工園西の神明神社（尾関のお宮）で、カラコバシの枯葉がまだ枝に着いていた。これも本種の特徴である。

1989年3月21日 松倉町川原→松倉町神明神社  
→小網町川原→総合スポーツ公園→小網町神明神社  
→エーザイ工園南側川原

今日はよく晴れ風もなく野外を歩くには最適な日である。川原のオニグルミには蕾が着き、折った枝から樹液が垂れ落ちた。これから開花し新葉を成長させる為に、根の吸水力が大きくなっていることがわかる。水辺のコナヤナギは新葉が大きくなり、雌花は子房がふくらみ果実になりかけている。砂地にはアレチマツヨイグサのロゼット葉が多い。松倉町神明神社（小鳥のお宮）に寄る。西側の原葉樹林ではヤブツバキの花が咲き、林下に春の花ヒメズミを見る。境内では保護樹エドヒガンが満開で美しい。再び川原に戻り、カキドオシの花、ナガバカワヤナギの花等を見る。ヒガンバナの緑葉が各所にある。ウグイスやキジの鳴声を聞き暖かい陽光のもとでの観察は寂しかった冬の観察に比べると実に楽しい。小網町の山林ではヤマコウバシやアベマキの昨年の結実が1か月前と同様まだ樹上に着きよく立立つ。総合スポーツ公園内の神明神社（西小網のお宮）に寄る。ここもヤブツバキが満開で、イボトナギの新葉が出ている。エーザイの薬用植物園では、オキナグサ、ミツマタ、ヤシヤブシ、アンズ、ユズタウメ、レンギョウ、チョウセンレンギョウ等の花が見られた。エーザイ工園南の川原でイヌスズナの花を見る。草木の春の息吹きを感じる一日であった。

### 3. 川島町自生植物目録

川島町史には山本保雄氏提供の植物目録が載せられているが、それによると町内で619種の植物が記録されている。1988年度18回の調査と以前に記録したものを加えて469種を数えることが出来た。ただ町全体を私1人で見ているので、どうしても見落としがあり長年かかって何回

も歩かないことには完全な目録は出来ない。次にあげるものは不完全なものだが、一応私が見た植物である。町内に自生または野生化したもので、明らかな栽培植物は入っていない。山本氏の記録に比べると少ないが、これは同氏が川島小学校に勤務され何度も詳しく調査されたこと、開発により失われたものがある為である。山本氏には以前から親しく御指導戴いており、目録を参考にさせて頂き御礼申し上げます。

川島町自生植物	山本保雄氏記	佐藤記録
双子葉植物	888種	812種
単子葉植物	176	138
裸子植物	7	5
シダ植物	48	19
計	619	469

#### 被子植物・双子葉植物

キク科 ハルノノゲシ、オニノゲシ、ニガナ、ジシバリ、オオジシバリ、アキノノゲシ、ホソアキノノゲシ、トウカイタンポポ、オニツバニコ、コウゾリナ、キツネアザミ、ノアザミ、ダンドボロギク、ベニバナボロギク、ノボロギク、フキ、トキンソウ、ヨモギ、カワランジン、カワラヨモギ、オオキケンイギク、アメリカセンダングサ、コバセンダングサ、シロセンダングサ、コセンダングサ、クワイモ、クササブロウ、ブタクサ、オオブタクサ、オオオナモミ、イガオナモミ、ヒメコグサ、チチコグサモドキ、ウスベニチコグサ、カワラホオコ、ヒメムカシヨモギ、ヒメジョオン、ハルジョオン、オオアレチノギク、ヨメナ、ノコンギク、キダチノコンギク、ウキギク、オオウダチソウ、セイタカウダチソウ、ヒヨドリバナ

キキョウ科 キキョウソウ、ツリガネニンジン  
ウリ科 アマチャズル、カラスウリ、アレチウ

リ、スズメウリ  
スイカズラ科 スイカズラ、ガズミ、サンゴジュ  
アカネ科 アカネ、ヤエムグラ、カワラマツバ、ヘクソカズラ、クチナシ、オオフタバムグラ  
オオバコ科 オオバコ、ヘラオオバコ、ツボミオオバコ  
ハエドクソ科 ハエドクソウ  
キツネノマゴ科 キツネノマゴ  
ゴマノハグサ科 ビロドモウズイカ、オオイヌフグリ、タチヌフグリ、サギゴケ、トキワハゼ、アゼナ、ウリクサ、マツバウンラン  
ナス科 イヌホオズキ、ヒヨドリジョウゴ、ワルナスビ、クコ  
シソ科 ヒメジョウ、コシロネ、ミゾコウジュ、アキノタムラソウ、メハジキ、ホトケナギ、カキドオシ、キランソウ  
クマツヅラ科 クサギ、ムラサキシキブ、アレチハナガサ  
ムラサキ科 キュウリグサ、ハナイバナ  
ヒルガオ科 アメリカネナシカズラ、ヒルガオ、マアサガオ  
ガガイモ科 ガガイモ  
キョウチクトウ科 テイカカズラ  
モクセイ科 イボトナギ、ネズミモチ  
エゴノキ科 エゴノキ  
ウラボシ科 コナシビ  
ヤブコウジ科 ヤブコウジ、マンリョウ  
ツツジ科 シヤシヤンボ、アセビ  
ミズキ科 アオキ  
セリ科 セリ、セントウソウ、ヤブジラミ、オヤブジラミ、ツボクサ、チドメグサ  
ウコギ科 タラノキ、カクレミノ、ヤマウコギ、クズタ、ヤツデ  
アカバナ科 コマツヨイグサ、マツヨイグサ、アレチマツヨイグサ、アカバナ

ミソハギ科 ミソハギ  
クミ科 アキグミ、ナワシログミ、ツルグミ  
スミレ科 ニオイシズメ、タチツボスミレ、スミレ  
オトギリソウ科 オトギリソウ  
ツバキ科 ヒサカキ、サカキ、モッコク、ヤブツバキ、サザンカ、チャ  
ブドウ科 ノブドウ、ヤブガラシ、ツタ、エビズル  
ムクロジ科 ムクロジ  
カエデ科 タカオモミジ  
ミツバウツギ科 ゴンズイ  
ニシキギ科 ツルウメモドキ、マユミ、コユメミ、マサキ  
モチノキ科 モチノキ、クロガネモチ、アオハダ、ソヨゴ、ウメモドキ、イヌツゲ  
ウルシ科 ハゼノキ、ヤマハゼ、ヤマウルシ、スルデ  
トウダイグサ科 オオニシキソウ、コニシキソウ、エノキグサ、アカマガシラ  
センダングサ科 センダングサ  
ニガキ科 シンジュ  
ミカン科 マツカゼソウ  
フウロソウ科 アメリカフウロ  
カタバミ科 カタバミ、ムラサキカタバミ  
マメ科 クズ、キツネササゲ、ヒメクズ、タンキリマメ、ツルマメ、スズメノエンドウ、カスマダサ、カラスノエンドウ、ナンテンハギ、ヤハズソウ、マルバヤハズソウ、ツクシハギ、ニシキハギ、マルバハギ、メドハギ、イタチハギ、ヌズビトハギ、アレチヌズビトハギ、クサネム、ニセアカシア、ゲンゲ、ノダツジ  
ウコギ科 タラノキ、カクレミノ、ヤマウコギ、コメツツメクサ、クララ、カワラケツメイ、ネムキ  
バラ科 ノイバラ、テリハノイバラ、キンミズ

ヒキ、ヘビイチゴ、ヤブヘビイチゴ、カワラサイコ、オヘビイチゴ、ニガイチゴ、クサイチゴ、ナワシロイチゴ、フユイチゴ、クサボケ

ユキノシタ科 ウツギ、ユキノシタ

ペンケイソウ科 コモチマンネンゲサ、ツルマンネンゲサ

アブラナ科 オオアラセイトウ、ヤマハタバゴ、イヌナズナ、ナズナ、タネツクバナ、ジャンゾン、イヌガラシ、スカシタゴボウ、セイヨウアブラナ、セイヨウカラシナ、マメゲンバイナズナ

ケシ科 タケニダサ

クスノキ科 ヤマコバシ、クスノキ、ヤブニッケイ

モクレン科 サネカズラ

ツツラフジ科 オオツツラフジ、カミエビ

アケビ科 ムベ、アケビ、ミツバアケビ

キンボウゲ科 センニンソウ、ウマノアシタタ、キツネノボタン、アキカラマツ、ヒメウス

スイレン科 ヒツジグサ

ナデシコ科 カワラナデシコ、フソグロ、ムシトリナデシコ、ノミノツヅリ、ツメクサ、オランダミミナグサ、コハコベ、ミドリハコベ、ウシハコベ、ノミノフスマ

スベリヒユ科 スベリヒユ

ツルナ科 ザクソウ、クルマバザクロソウ

ヤマゴボウ科 アメリカヤマゴボウ

ヒユ科 ヒカゲイノコズチ、ヒンタイノコズチ、イヌビユ、アオビユ、ノゲイトウ

アカザ科 アカザ、コアカザ、ケアリタソウ

タデ科 ヤブタデ、イヌタデ、オオイヌタデ、ヤナギタデ、サクラタデ、シロバナサクラタデ、ボントクタデ、ミゾソバ、ミゾサデクサ、ママコノシリヌグイ、イシミカワ、アキノウナギズル、ツルドクダミ、オオケタデ、ミズ

ヒキ、イタドリ、ギシギシ、アレチギシギシ、スイバ

ビャクダン科 カナビキソウ

イラクサ科 ヤブマオ、ナガバヤブマオ、アカウ、カラムシ

クワ科 カナムグラ、コウゾ、クワ、クワクサ

ニレ科 エノキ、ムクノキ、アキニレ

ブナ科 スダジイ、ツブラジイ、シラカシ、アラカシ、コナラ、クスギ、アベマキ、クリ

カバノキ科 カワラハンノキ

ウルミ科 オニグルミ

ヤナギ科 アカメヤナギ、タチヤナギ、コゴメヤナギ、シダレヤナギ、ジャヤナギ、ウンリュウヤナギ、キヌヤナギ、ナガバカワヤナギ、コリヤナギ、イヌコリヤナギ、ネコヤナギ

ドクダミ科 ドクダミ

単子葉植物

ラン科 エビモ、モジズリ

アヤメ科 ニワゼキショウ、ジャガ、キショウ

ヤマノイモ科 ヤマノイモ、オニドコロ

ヒガンバナ科 ヒガンバナ、ナツズイセン、タマズダレ

ユリ科 サルトリイバ、シオデ、ジャンヒゲ、ヤブラン、チゴユリ、ホウチャクソウ、アマドコロ、ツルボ、ウバユリ、ノビル、ノカンゾウ、ヤブカンゾウ

イグサ科 スズメノヤリ、イグサ、コウガイゼ

キショウ、クサイ、ホソバノコウガイゼキショウ

ミズアオイ科 コナギ

ツククサ科 イボクサ、ツユクサ、ヤブシヨウ

ガ

ウキクサ科 アオウキクサ、ウキクサ

ヤシ科 シュロ

カヤツリグサ科 ヤガミスゲ、マスカサゲ、

アゼスゲ、アゼナルコスゲ、アオスゲ、クサスゲ、ヒメカンスゲ、ナキリスゲ、ヒゴクサ、シラスゲ、ハタガヤ、テンツキ、ヒドリコ、ヤマイ、カンガレイ、サンカクイ、ホタルイ、コマツカサススキ、ヒメグ、カヤツリグサ、コメガヤツリ、クダガヤツリ、タマガヤツリ、アオガヤツリ、ハマスゲ

イネ科 ジュズダマ、アシボソ、ササガヤ、アブラススキ、ススキ、オギ、チガヤ、ウシノシバ、メリケンカルカヤ、オガルカヤ、セイバシモロコシ、コブナグサ、シバ、トダシバ、ナルコヒエ、スズメノヒエ、シマスズメノヒエ、チジミギサ、コチジミギサ、ヌカキビ、オオクサキビ、イヌヒエ、ハイヌメリ、ヌメリグサ、メヒシバ、コメヒシバ、アキメヒシバ、エノコログサ、アキノエノコログサ、キンエノコロ、チカラシバ、ハルガヤ、クサヨシ、スズメノテッポウ、ネズミノオ、ヒエガエリ、ノガリヤス、ヤマアワ、ギョウキシバ、カズノコグサ、オヒシバ、アゼガヤ、ハナスカススキ、カラスムギ、カニツリグサ、ヒコバンソウ、ヨシ、ツルヨシ、ニホコリ、カゼクサ、コスズメガヤ、シナダレスズメガヤ、スズメノカタビラ、ミゾイチゴツナギ、ナギナタガヤ、オニウシノケグサ、キツネガヤ、イヌムギ、ウマノチャヒキ、ホソムギ、ネズミムギ、カモジグサ、アオカモジグサ、マコモ、アシカキ、ネザサ、メダケ

トチカガミ科 セキショウモ、コカナダモ、オオカナダモ

ヒルムシロ科 エビモ、ヤナギモ、ホソバミズ

ヒキモ

ガマ科 ガマ

裸子植物

ヒノキ科 ヒノキ

スギ科 スギ

マツ科 アカマツ、クロマツ

マキ科 イヌマキ

シダ植物

ウラボシ科 ノキシノブ

イノモトソウ科 ワラビ、イノモトソウ、イワ

ヒメワラビ

シシガシラ科 シシガシラ

チャセンシダ科 トランオシダ

オシダ科 シケシダ、イヌワラビ、アイアスカ

イノデ、リョウメンシダ、ヤブソテツ、ヒメ

ワラビ、ペニシダ、オクマワラビ

カニクサ科 カニクサ

ハナワラビ科 フユノハナワラビ、オオハナワ

ラビ

トクサ科 スギナ、イヌドクサ

#### 4. ヤナギ類

川にはヤナギはつきものであり、町内の川原には各所に自生する。特に町西端の一宮市大目との境界附近や松倉町の本流左岸の中州に立派なヤナギ叢がある。一般には枝の垂れ下がるシダレヤナギだけをヤナギと思いがちだが、大部分のものは垂れ下らない。種によっては山地にあって川にはないものもある。例えばキツネヤナギは大山市の山間部等にはよくあるが木曽川川原では1株も見られなかった。美濃山間部等には各所にバココナギがあるが、これも水辺から離れた所にあり川原では見ることがない。ヤナギの分類は次の様な理由で非常に難解である。

- ①花の時期と葉のある時期が別で、両方あることが少ないから、花の時期は下の落葉しか見ることが出来ない。
- ②葉の成長段階により形が異なる。従って若葉では種の同定が困難である。
- ③葉の形は種による違いが少なく、また同一

種・同一株でも形の変異が多い。

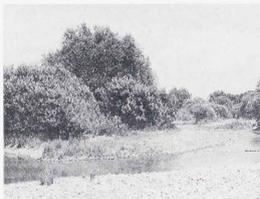
- ④葉が対生の種も完全な対生でなく、枝により互生になる場合もある。
- ⑤花の構造が単純だから、種による花の各部の違いも微妙である。
- ⑥雌雄異株だから両方の花を調べなければならぬ。
- ⑦雑種が起きやすく、どの種か判断に迷うことがある。
- ⑧過去に研究された文献が少なく、花を詳細に画いた図鑑等も少ない。

この為種の同定に苦労したが、何度も観察するうちに疑問のものも時にはあるが、何とかわかる様になった。葉だけによる検索は無理な点もあるが、川島町の川原にある11種については次のようである。

1. 枝は垂れ下がる。
  - 2. 枝はねじれ、葉全体は上下に波曲する。
    - ..... ワンリェウヤナギ
  - 2. 枝は真直に伸び、葉は全体に平ら。
    - ..... シダレヤナギ
1. 枝は斜上または上に伸びる。
  - 2. 葉はほぼ対生、時に互生の枝もまじる。
    - ..... イヌコリヤナギ
  - 3. 葉は狭長楕円形で鈍頭、葉柄短かい。
    - ..... コゴメヤナギ
  - 3. 葉は線形で細長く鈍頭、葉柄はより長い。川原では稀。
    - ..... コリヤナギ
2. 葉は明らかに互生。
  - 3. 成葉の下面は毛でおおわれる。
    - ..... ネコヤナギ
  - 4. 葉は狭長楕円形、若枝は有毛。下流部にはない。
    - ..... ネコヤナギ
  - 4. 葉は狭長楕円形で先尖る。下面に毛多く銀白色。下流部にもある。
    - ..... キヌヤナギ
  - 3. 成葉の下面はほとんど無毛。
    - ..... コゴメヤナギ
  - 4. 葉柄には腺体があり、しばしば小葉物が着く。葉柄円形で若葉は赤い。
    - ..... アカメヤナギ
  - 4. 葉柄に腺体なく、葉はより細長い。
    - ..... コゴメヤナギ
  - 5. 成葉は小さく5cm内外で下面は白い。高木になる。
    - ..... コゴメヤナギ
  - 5. 成葉はより大きく、8~10cm。
    - ..... ナガバカワヤナギ
  - 6. 葉の裏面は中肋に対し鋭角に出る。葉は楕円形だが一般に下部が幅広く

先が徐々に細くなる。

- ..... ジャヤナギ
6. 葉の裏面は中肋に対し鈍角に出る。先はあまり細くならない。
7. 葉は楕円形で、葉柄が短い。
- ..... タチヤナギ
7. 葉は広披針形で中央部の両縁はほぼ平行。葉柄はより短い。
- ..... ナガバカワヤナギ



町西端のヤナギ林

### (1) ネコヤナギ

樹高は低く1~2mのものが多い。下流部になく木曾川では群落としては一宮市北方町の名鉄線鉄橋附近までである。より下流では笠松町松枝、尾西市東加賀野で単木を少数見ただけである。上流から流されて下流部に活着してもよさそうだが、なぜか見あたらない。花は苞の先が黒くて尖り、花柱(めしべの先端と子房との間の部分)が細くて長いのが本種の特徴で、開花期も8月中旬で早い。川島町内では水流に最も近い所で増水時には水中に小群落がある。環境庁の調査で水野瑞夫氏により川島町等でチヨウセンネコヤナギが記録されている。松倉町の川原で見したが、ネコヤナギと区別しにくい株もあり、今後検討したい。これはネコヤナギより小さく0.5~1mで葉は幅広く先が尖り成葉は無毛である。花の苞の背面に毛がないのがネコヤナギとの違いとされるが、区別は困難である。

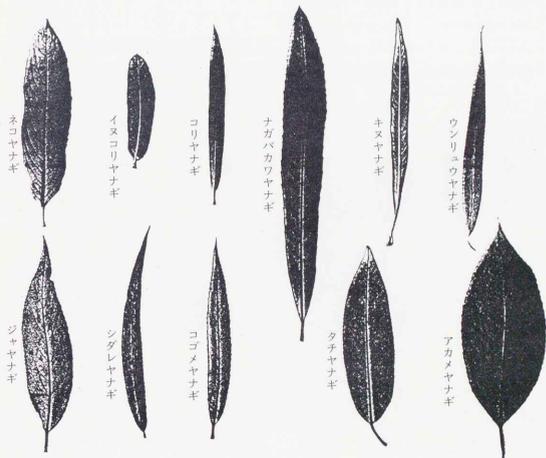
### (2) イヌコリヤナギ

柳行李をつくるコリヤナギに似るが、役に立たないというのでイヌコリヤナギとつけられた。葉が他種と違って対生だからわかりやすい。しかし所々対生がずれて互生の様になる枝もあるので、一枝だけでなく全体を見なければならぬ。花は3月下旬から4月上旬に見られ花序もほぼ対生である。葯(花粉の入った袋)は濃紅色でよく目立ち、花粉が出てしまうと黒くなる。高さは2m位のものが多く、川島町内の川原に点々と自生する大きな群落はつづらない。役に立たないというが、ふいりのものが生花用に栽培されている。

### (3) コリヤナギ

栽培のものが稀に川原に野生化しており、川島大滝の下流側等で見た。イヌコリヤナギより葉が細長く、花の各部は全体に紅色をおびて美しい。中国または朝鮮半島から、細工の技術と共に古い時代に日本へ入ってきた。この地方では岐阜県穂積町が柳行李の産地であったが、現在では生産していない。昔から兵庫県朝馬地方が主産地で、豊岡市は柳製品の名産地として有名であった。しかしこれも現在職人は1人残るだけという。この様に伝統工芸は滅びつつあるが、かつて植えられていたものが放棄畑に残っていたり、庭に植えられて生花用に使われる。

川島町のヤナギの葉

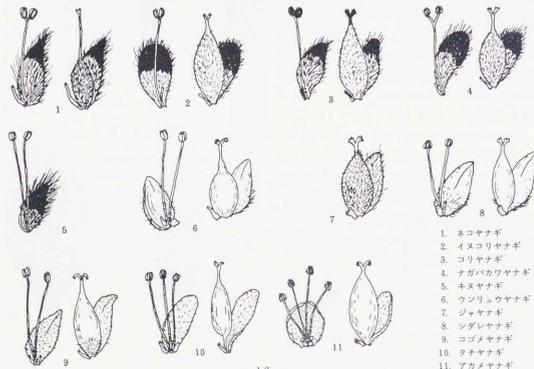


本曾川のヤナギの分布(佐藤調)

種名	上流よりの地名												
	今渡	犬山	草井	川島	北方	里小教	東加野井	祖父江	桑原	給父	島福	弥富	長島
ネコヤナギ	++	++	++	++	++		+						
イヌコリヤナギ	+	++	++	++	++			+					
●コリヤナギ		+		+								+	
ナガバカワヤナギ	+	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++
●キヌヤナギ	+			+			+	+	++	++			
○ノエヤナギ			+										
●ウンリュウヤナギ				+									
●ジャヤナギ	+			+	+			+					++
●シダレヤナギ													
●ゴメヤナギ	+	+	+	++	+	+							
タチヤナギ			++	++	++	++			+	+	++		
アカメヤナギ	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++

●は栽培種が野生化したものは外来種 ++++多、++普通、+少

川島町内のヤナギの花(左雄花、右雌花)



1. ネコヤナギ
2. イヌコリヤナギ
3. コリヤナギ
4. ナガバカワヤナギ
5. キヌヤナギ
6. ウンリュウヤナギ
7. ジャヤナギ
8. シダレヤナギ
9. ゴメヤナギ
10. タチヤナギ
11. アカメヤナギ

[4] ナガバカワヤナギ

北村四郎: 原色日本植物図鑑本編Ⅱ(保育社)その他ではカワヤナギというが、牧野図鑑(北條隆)ではネコヤナギをカワヤナギと称し、北條の「カワヤナギをナガバカワヤナギと呼んでいる。まぎらわしいのでカワヤナギという和名は使わず、ネコヤナギ・ナガバカワヤナギと呼ぶことにする。和名通り葉が長く葉縁の中央部が左右ほぼ平行になる。しかし枝によってはあまり長くない葉が着くこともあるので、樹全体を見るべきである。花期はネコヤナギより少し遅く4月上旬で、舊はネコヤナギでは先が尖るのに対し、本種では円いので区別が出る。川原ではアカメヤナギに次いで多く、川島町内でも群落が見られる。

[5] キヌヤナギ

栽培のものが野生化して松倉町等の川原に見られ、笠田町の畑に植えられている。葉の裏は2相名の様に絹毛におおわれ銀白色で、風に吹かれてひらひらし遠方からでもよく風が。おそ

らく江戸時代に朝鮮等から渡来したものである。その為雌株だけしか見られない。ところが羽島市桑原町の本曾川川原や揖斐川町の揖斐川川原には雌株もあった。最近ヤナギ学者の木村有香氏により、北海道平上高地にあるエゾキヌヤナギが美濃地方にも自生することが報告された。これには雌雄両株共あるので、これ等の雌株はエゾキヌヤナギではないかと調べたがやはり違うようで、普通のキヌヤナギと思われる。今後検討したい。

[6] ウンリュウヤナギ

中間原産で生花用に栽培される。それが種に川原で野生化しており、澗町の南沢川で見た。枝がねじれてたれ下がり、葉も上下に大きく波曲するので、雲竜樹といわれる。クワにもこれによく似た雲竜葉があり、生花用に使われる。ウンリュウヤナギは雄株が多く、雌株は少ない。花の中の腺体は背腺体と腹腺体と、雌雄共に2個ずつあり、他のヤナギとの区別点である。

川島町のヤナギの特徴

種	葉			雄花			雌花(苞は雄花本数と同じ)			樹高	その他
	形	裏面	春の芽	雄花の数	雄花の形と色	子房の形	子房の柄	花柱の長さ	密着の数		
ネコヤナギ	長楕円	灰白絹毛	互生	2(解は1本)	1 長楕円、先とがらふ半白色	密生	なし	2.5-2	■	1	小低木 花冠一層深い
イヌコリヤナギ	狭長楕円	粉白絹毛	互生	2(解は1本)	1 倒卵、先白い上半白色	密生	なし	0.5	■	1	低木
コリヤナギ	卵一長楕円	粉白絹毛	互生	2(解は1本)	1 倒卵、先白い上半白色	密生	なし	0.5	■	1	低木 栽培種
ナガバカワヤナギ	広 披針	白絹毛	互生	2(解は1本)	1 倒卵、先白い上半白色	密生	なし	0.3-0.5	■	1	低~小高木
キヌヤナギ	狭 披針	銀白絹毛	互生	2	1 長楕円、先ややとがらふ、上半白色	密生	なし	未知	■	1	低~栽培種
ウンリュウヤナギ	楕状披針	粉白絹毛	互生	2	2 長楕円、先ややとがらふ、雄花の苞は、雄花の苞は、雄花の苞は	密生	なし	短	■	2	高木 栽培種 枝葉はねむる
ジャヤナギ	楕円	粉白絹毛	互生	未知	未知	密生	なし	短	■	2	高木 採種 枝葉はねむる
シダレヤナギ	楕状披針	灰白絹毛	互生	2	2 楕円、先ややとがらふ、雄花の苞は、雄花の苞は、雄花の苞は	密生	なし	短	■	1	高木
ゴメヤナギ	披 針	粉白絹毛	互生	2	2 楕円、先ややとがらふ、雄花の苞は、雄花の苞は、雄花の苞は	密生	なし	短	■	1	高木
タチヤナギ	長 楕円	白絹毛	互生	3	2 倒卵、先白い上半白色	密生	なし	1.2mm	■	1	低~高木
アカメヤナギ	楕円~円	粉白絹毛	互生	5~6(4~7)	3~6 楕円、先ややとがらふ、雄花の苞は、雄花の苞は、雄花の苞は	密生	なし	1.5-2	■	2または1	高木 葉柄に腺あり 花冠一層深い

### (7) ジャナナギ

別名オシロヤナギと呼び、雌株しか見られず、大陸から帰化したものらしい。木曾川川原では女川に見られるが、川島町内ではなぜか少なく、松倉町でだけだてである。樹高4～5mになり古木もあり、水流から少し離れた所にある。枝は分岐点で極めて折れやすく、雌花序が短かいのも本種の特徴である。雄株がないので種子は出さず、雌花序は役に立たないまま下に落ちている。濃尾平野の水田のあぜ道にも点々と見られ、4月下旬に落ちた花序を見る。

### (8) シダレヤナギ

原産地不明だが、中国であろうといわれる。広く並木に植えられ旅行動にも親しまれる。川原に稀に野生化する。大部分は雌株だが、稀に雌株もあり、稲沢市内の道端と長良川川原で見た。室井節・清水美重子：ほとんどの植物観察(地人書館)によれば、雄株は枝が長く下垂するが、雌樹はあまり伸びないという。しかし前記の2例の雌樹では花を見ないか樹形だけではわからなかった。

### (9) コゴメヤナギ

コゴメとは葉が小さいことによるものだが、長さ5cm位(3～7cm)で中には葉が長くなり、一枚だけでは他種と間違える場合もある。樹形は割に高く5～6mになり、川原では水辺から少し離れた所にある。川島町には多く、特に南端と一宮市大日との境や、笠田町の浅沢川附近に大木が見られる。コゴメヤナギの名は大垣市出身の飯沼啓彦の草木園融木部から採用されたものである。100年以上も前に感奮がヤナギを採集した長良川の小紅の渡し(岐阜市一日市場)を訪れた。護岸工事でヤナギは少なくなっていたが、コゴメヤナギは今も健在であった。

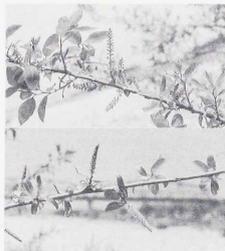
### (10) タチヤナギ

川原に点々と見られ、河田町の下や松倉町の

川原で見る。この地方では水田の境の目印に植えられる。葉はかたい感じで、葉の長さの割に葉柄が長い。新葉は中央部が茶褐色になる特徴があり、慣れると本種を見分けるポイントとなる。おしべが8本あるのも特徴で他のヤナギには8本ものはない。ただ雄花が密に着く花序の中央部では、他の花のおしべを区別しにくいので、花がまばらに着く端の部分で見るとよい。雌花の子房は無毛で柄のあるのもよく目立つ性質である。

### (11) アカメヤナギ

別名マルバヤナギとも呼ぶ。アカメヤナギの名は、花屋では別々の栽培種のフリソデヤナギのことをいうので、マルバヤナギのほうが間違わなくてよい。しかし葉形は変異多く、長い葉も多いためその点ではこの名は不適当である。系統分類的に他種と縁の遠いものである。おしべが5～6本あるのが特徴で、花期が一番遅い。その頃には若葉も見られ托葉が大きい。この点はボケの葉に似るので、学名の示種名にはその意味を示す。川原のどこにもあるが、8～4月上旬は花も葉もないで見逃しやすい。下に落ちている前年の落葉で見分ける。



アカメヤナギ雌株(上) アカメヤナギ雄株(下)

## 5. ヤナギ以外の落葉樹

川島町附近の本来の植生は常緑樹からなるいわゆる照葉樹林であるが、これが伐採された跡に出るものが、二次林である。各地に見られる雑木林は二次林で、落葉広葉樹を主体とする。すなわち、エノキ、ムクノキ、アベマキ、ネムノキ、アカメガシワ、クサギ、スズル等である。木曾川川原では、エノキ、ムクノキに加えてアキニレ、オニグルミが多い。また川原特有のカワラハランキが所々で見られる。雑木林は夏になると林縁部につる植物が巻き着き、低木群が林をおおう。これ等をマント群落という。またその下には林の周辺部に借状にひろがる草本類があり、これをソデ群落という。マント・ソデ群落は一見樹木にとって邪魔物と思われがちだが、自然界はよくしたものでそれなりに効果がある。これがあることにより、林内の乾燥を防ぎ日光の直射をさけ、林内が適温適湿度に保たれる。人が多く集まる公園等では、林縁部のつるや低木は外観上よくないので取り除くのは止むを得ない。しかし雑木林の場合は多少見かけは悪いが邪魔物扱いしないで、自然のままにしておいてほしい。

### (1) ムラサキシキブ(クマツヅラ科)

高さ3m内外の落葉低木で、各地の低山地や原野に自生する。葉は長楕円形で葉面には腺点がある。花は淡紫色で6～8月に咲く。おしべが4本あり長く花の外につき出る。秋になると径3mm位の紫色で美しい果実が出る。これを紫玉部の名を借りて美化したものである。変異が多く、果実の白いものはよく庭等に植えられシロキシキブと呼ぶ。河田町の竹林等で見た。

### (2) クサギ(クマツヅラ科)

和名の通り薬に嫌な臭いがあるが、時に若葉を食する。全国どこにも広く分布する小高

木で、川島町内の道端等によく見かける。真夏におしべ4本を少しべ本が花の外に長く伸び出した特徴ある花を着ける。葉は長柄をもち対生し広卵形で変り、縁は低い不明の鋸歯があるが時にはほとんどなくなる。果実は熟すると丸く藍色になり、染料に用いられる。冬期の観察では紫褐色の老芽を折ると特異の臭いがく本種とわかる。枝は折っても全く香りはなく、中心の髄が太く白い。



クサギ

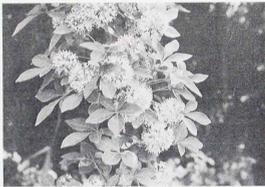
### (3) エゴノキ(エゴノキ科)

山野に多い落葉樹で、松倉町や河田町の雑木林にある。5月に白い花を10月にぶら下がる果実を見た。エゴノキとは果皮がのを刺傷してえごいで意であらう。果皮にはエゴサポニンを含むので、昔は洗濯や魚とりに使用した。葉は長楕円形で先が尖るが、同属でよく庭に植えるハクワンボクと違って葉の形に特徴が少ない。しかしルーペで見ると若枝と共に葉に葉状毛(1か所から葉の縁の様に放射状に出る毛)があるのでエゴノキとわかる。よく花が着き果実も目立ち、また特有の形の虫こぶが着くことが多いで見分けやすい。

### (4) ヤマウコギ(ウコギ科)

山野に普通の低木で枝に刺がある。葉は互生し1枚の葉は5小葉からなる掌状複葉となる。初夏に小さな花が球状に集まった花序が出る。

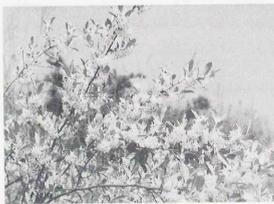
木曾川川原ではよく見かける樹で、松倉町や北山町の堤防下に見た。植物の組織を顕微鏡観察する時、うすい葉等はニワトコの葉の髄に、はさんで切片をつくる。昔からニワトコを使っていたが、材料が少なくなりヤマウコギの髄で代用することがある。



ヤマウコギ

(5) アキグミ(グミ科)

川原にある落葉低木で、特に河田橋から東の南沢川に多かった。葉は長楕円形で表や裏に銀白色の鱗片がある。グミ類には皆この勲章形をした鱗片が着くので、それとすぐわかる。花は葉基部に東生して初夏に開き、秋に果実は赤く熟す。子供の時にはこれをよく食べたが、今口に入れてみると酢っぱいだけで二度と食べる気がしない。



アキグミの花



アキグミの果実

(6) ゴンズイ(ミツバツギ科)

役に立たない魚にゴンズイというのがあるが、この樹も利用価値がないのでこの名をつけたという。葉は奇数羽状複葉で対生し、小葉はふつう5~9個ある。初夏に咲く花は小さくてあまり目立たないが、果実は外面が帯赤色、裂けて見える内面は鮮紅色で美しい。中の種子は黒色で充臍があり、秋には樹上で赤と黒がよく目立つ。松倉・小網・河田町等の雑木林で見た。



ゴンズイ

(7) ツルワメモドキ(ニシキギ科)

ワメモドキというモチノキ科の樹に似ていてつるになるのでツルワメモドキという。つるは無毛で長く伸び他の樹にまわり着く。町内の雑木林や川原の河辺林にもよく見かける。葉は互生して楕円形~倒卵形で、先が急に尖る。雌雄異株で、雌株では果実が秋に熟すると8裂

する。中から黄赤色の種子が露出して美しい。晩秋花が少なくなると、この枝を生花に使う。

(8) マユミ(ニシキギ科)

マユミとは昔この材で弓を作ったからという。山地に普通の低木で、葉は長楕円形で細鋸歯があり対生する。葉の形や大きさ、果実の大きさに委異が多く、変種する場合もあるが、中間型があって区別しにくいものが多い。初夏に枝分かれした花序を付け、4数からなる淡緑色の花を着ける。雌雄異株で雌株には秋になってよく目立つ果実をふら下げる。ほぼ4角形で熟すると淡紅色となり4裂して赤い種子を露出する。小網町の雑木林中で紅葉した樹を見た。

(9) ムクロジ(ムクロジ科)

山内に野生するが庭にも植えられる高木で、河田町の雑木林で見る。10月に特徴ある果実を見たがこれはあまり例のない偶数羽状複葉もつので容易にムクロジとわかる。羽状複葉は先端に小葉が1枚あって奇数になるものが多いが、本種は先端になく両側の小葉だけだから偶数になる。それに両側の小葉は少しずれて対生し、基部は左右の形が少し異なる等特徴が多いので見分けやすい。果実は冬中着いていてよく目立つ。果皮にサボニンが含まれているので、昔は石けんの代用にされた。先年4月にまだ前年の果実が樹に残っており、洗濯に使用してみたが少し色が立った。黒い種子は羽根つきの羽根の球に利用される。



ムクロジ

(10) ヌルデク(ウルシ科)

川島町内のどこにでもある樹で高さ5m位になる。葉は奇数羽状複葉で長さ80cm位。葉軸は小葉間に翼をもっているのが特徴である。夏に枝先に円錐状の花序を付け、小さな白花が集まる。鉄砲川の周辺等遠方からでもこの花で本種とわかる。秋には美しく紅葉しヌルデモミジという。葉にヌルデノフシムシが寄生して5倍子という虫こぶをつくる。

(11) センダン(センダン科)

四国や九州の海岸や山地に自生するが、普通は人家に植えられその種子が飛んで川原等に野生化している。5月下旬に渡橋の下で淡紫色の



センダン

美しい花に出合う。1個の花は小さいが花序が大きいのでよく目について見事である。葉は1枚が多くの小葉に分かれて2~8回羽状複葉となる。果実は多く着き卵形で、昔小学校の校庭で拾って遊んだ記憶がある。「センダンは双葉より香し」の香木のセンダンとは全く別の植物である。川島町の某氏からよるさと史料館を通じて植栽樹の名を尋ねられ、モクゲンジとお答えした。この葉はセンダンによく似ているのでセンダンノボダイジュの別名があり、私も花がないと商者を時に間違える。しかしこの時は幸い花が着いていたので迷わずにモクゲンジとわかった。



シンジュ

(12) シンジュ (ニガキ科)

ニワウルシともいうがウルシ科ではなく、かぶれない。庭や市路に植えるが繁殖力旺盛で、野生化したものがよく見られる。川島町内でもどこを歩いても15mにも伸びたものが目につく。葉は奇数羽



町役場西のシンジュ

状複葉で鋸歯の下面に腺点があるので、形よく似た他の複葉のものと同様に区別出来る。中国原産の樹だが日本の伊賀橋から果実の産地が報告され、かつては我が国にも自生していた。川島町役場の西に古木があり、シンジュ類の資料として第二次大戦中に植えられたと説明板に書いてある。

(13) アカメガシワ (トウダイグサ科)

町内の川原や雑木林に多く、新芽が赤いのでこの名がつく。葉身と葉柄の境の上面に2つの腺点があり、葉身下面には小腺点が散在するので、似た形をした例えばキリ、アブラギリ、イイギリ等と区別出来る。雌雄異株で7月頃よく目立つ花を付ける。開地を好み成長が早く伐採地や崩壊地等にはすぐ生えて来る樹である。わ

れわれの先祖達は昔食器代りに大きな草木の葉を使った。このアカメガシワやホオノキ、カシワ、サルトリイバラ等今でも食物をのせたり包むのに使われる所がある。



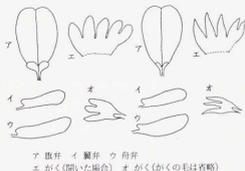
アカメガシワ

(14) ハギ類 (マメ科)

秋の七草の1つにあげられ草本に入れる場合もあるが、ここでは落葉樹とする。以前は平地に普通にあるものとして、キハギ、マルハギ、ヤマハギの8種に分けた。キハギは木になる株の意で花の色等で他種と区別が容易である。また小葉が円形で花序が葉より短いものがマルハギ、小葉の先が尖り花序が葉より長いものがヤマハギと簡単に分けていた。ところが新しい分類ではヤマハギと称していたもの見分けがむずかしくなった。真のヤマハギは海拔400～500mの高原や山頂にあって、道端や人里にはない。平地で今までヤマハギといわれたものは、ツクシハギとニシキハギの兩種となる。ところがこの間には雑種もあって中々はっきりしない個体もある。秋山忍・大場秀章両氏によると、1集団に雄々の形の中間型が存在し、小葉上の毛の有無、がく裂片の形、旗弁の大きさ等によって色々の変異が認められる。川島町内の川原等に自生する4種について比較した。なおこのほかはこの地方で栽培されるものに、ミヤギノハギ、ケハギがある。

1. 芽は扁平で鱗片は2列に並ぶ。花は淡黄色で紫斑がある。小葉は鋭頭。……………キハギ
1. 芽は扁平でなく鱗片はらせん状に並ぶ。花は紅紫色。小葉は鋭頭または円頭か凹頭。
2. 花序は基部の葉より短い。がく裂片は先針状。小葉は多くは凹頭。……………マルハギ
2. 花序は基部の葉より長い。がく裂片は鋭頭～円頭。
3. 小葉の表面に圧毛がある。がく裂片鋭頭。旗弁の基部が小さい。……………ニシキハギ
3. 小葉の表面に圧毛がない。がく裂片鈍～円頭。旗弁の基部が大きい。……………ツクシハギ

ツクシハギ(左)とニシキハギ(右)の花



ア 旗弁 イ 翼弁 ウ 角弁  
オ がく(開いた場合) オ がく(かくの毛は省略)

(15) ネムノキ (マメ科)

川原や道路端等に多く7月頃淡紅色の花がよく目立つ。特におしべが長くマメ科とは思えないような変わった花である。しかし9月に果実を見るとマメの仲間とわかり中に扁平な種子がある。葉は2回羽状複葉で1枚の葉が多数の小葉



ネムノキ

に分かれる。小葉が夜間閉じて睡眠したように見えるのでネムノキという。7月初旬笠田町の雑木林で美花を見たが、熱帯が本場の樹だけあって花が落手である。

(16) ウツギ (ユキノシタ科)

ウツギは空木から由来した名で、枝が中空になるからである。ラテン語の学名は花の形を中心にした自然分類によっているが、和名は昔からの日本人の植物観や生活との関係により、つけられているので、必ずしも自然分類とは一致しないものがある。ウツギがその例で、ユキノシタ科、バラ科、ミズバウキ科、ドクウツギ科、フジウツギ科、スイカズラ科と各科に何々ウツギがある。ここでいうウツギは最も普通のもので、ウノハナともいう。「ウノハナにおう垣根に……」の歌のように暮のなかつた昔はこの花が咲くと田植の準備をする、農事の目安とされた。葉は対生で若枝と共に星状毛がありざつと。花はよくおしほの軸に腋生するのでこの仲間の特徴である。河田町の南深川の川原等に自生を見た。

(17) エノキ (ニレ科)

雑木林の主木となりまた単木として各地に見られる。松原の墓地には巨木があり、渡町の川原では落葉を見た。果実を小鳥が好んで食べ糞と共に種子を落すので分布が拡がる。だからエノキは斯の木との説もある。覆の字を当てるのは道路脇の大樹が夏に木陰をつくって豚人が休むからともいう。昔の街道の一里家にはエノキが植えられており、岐阜県垂井町(中山道)、尾西市富田(美濃路)、名古屋笠寺(東海道)のものをしている。子供時代一宮市の生家の隣家に大木があり、方言でヨノキと呼んでいた。1934年の室戸台風の時このヨノキの枝のゆれる音や折れる音聞き、恐怖でふるえていたことを思い出す。

(18) ムクノキ(ニレ科)

ムクノキは果実がエノキより大きく甘味も多いので、昔の子供のおやつになった。エノキは葉の先だけに鋸歯があるが、ムクノキは基部を除き全体に鋸歯がある。葉面がざらつが、これは葉面に、いぼ状突起のある毛がある為である。これを利用して骨や骨細工を磨くのに用いられる。エノキと同様、ムクドリ等人里の鳥が果実を食べるので種子が散布される。大木になると根が地上に出て板状になることが多く、板根という。川島町内では川原や民家附近に多い。

(19) アキニレ(ニレ科)

別名カワラケヤキともいうくらい川原に多く、河田橋の東側等護岸壁のコンクリートの隙間にさえ幼樹が多く生えている。落葉期でも枝が直角に出て先端が針の様に尖るので、アキニレの幼樹とわかる。葉は長楕円形で左右不等になりエノキやムクノキに比べて小さい。北山町の道路脇でアキニレ林を見た。



落葉期のアキニレ

(20) アベマキ(ブナ科)

これは川原にはなく、町内の雑木林内に入り河田町では高さ25mの大木を見た。牧野園産によれば、アベとは岡山県の方言でアバタの意味で樹皮にコルク層が発達して凹凸があるからという。樹皮を手で押すと他の樹より柔かい。マキは真木かあるいは薪の意味だろう。地中海地

方に産するコルクガシはコルク層を張る栓等に利用するが、アベマキもこれに似て利用される場合もある。葉はクリやクスギに似ているが、葉の下面に星状毛が密生して灰白色である点が異なる。どんぐりは大きく10月には河田町等で多数見られた。



アベマキのどんぐり

(21) コナラ(ブナ科)

山地に最も普通の落葉高木で成長も早い。いつか岐阜県谷汲で拾った本種のどんぐりを自宅庭に播いたところ短期間で成木になった。時に枝上に栗のいかり状の虫こぶを着ける。葉は倒卵状長楕円形で、温帯地域に多いミズナラに比べて鋸歯は小さい。花期は4~5月で雌雄同株だが雄花序と雌花序は別になる。コナラの別名をキオソと言ひ、これが松合町の地の周囲にあったので作下地と名付けられたという。

(22) カワラハンノキ(カバノキ科)

和名の通り川原にあり、木曾川では可見市や大山市に大群落がある。特に大山市橋太郎遺地のチャートの岩が並ぶ川原には多い。可見市の中濃大橋附近には大規模のカワラハンノキキーツルヨシ群落がある。ところが大山市より下流では点々と分布する程度で、海津町青割堤までぐらいて見ている。川島町では少く渡町の西で少数見ただけで、この仲間特有の果実がよく目立った。



カワラハンノキ



オニグルミ

(23) オニグルミ(クルミ科)

川原に点々と自生しており上流地方から種子が流れていたものといわれる。木曾川では長島以南の河口附近で他の樹木が全くない所でも、オニグルミだけは少数だが生育する。4~5月に雄花序と雌花序を着けるが、花柱が赤い雌花が特に自立つ。6~7月には密毛のある果実となり、10月には成熟し中にしわの多い硬い殻がある。この中に脂肪に富んだ子葉が薄い褐色の皮をかぶって入っており、この部分が食用になる。縄文時代の遺跡から多くの殻が見出され、大切な食糧であったことがわかる。現在では散

がむきやすい

外來のものが長野県等で栽培されている。オニグルミでは落葉期の冬でもよくわかる。それは落ちたあとの葉痕が大きく楕円に見えるから

落葉期のオニグルミ



1. 枝 2. 葉痕 3. 枝の横断面

どんぐりの木

属名	種名	葉	果		用	分	布
			成熟	食用			
シイ	ヌズグイ	常緑	なし	そのまゝ食用		川島町に自生	
	ツツジグイ	常緑	なし	"		川島町に自生	
マテバシイ	マテバシイ	常緑	なし	"		自生はないが島町の公園等に栽培	
	シロバカシ	常緑	なし	"		大飯地方より西に自生し東山麓地帯等に栽培	
コナラ	コナラ	常緑	あり	水さらし、加熟、飯汁使用		川島町の自生	
	ミズナラ	常緑	あり	"		この地方にないが岐阜県北郡等に多い	
	クヌギ	常緑	あり(強)	赤ねきしにくい		川島町に自生(栽培のものが多い)	
	アベマキ	常緑	あり(強)	"		川島町に自生	
	カシワ	常緑	あり(強)	"		この地方にないが栽培のものもある	
	ナラガシワ	常緑	あり(強)	"		川島町で見ていないが見聞寺跡地等に自生	
コナラ	クヌギ	常緑	あり	水さらし		川島町で見ていないが見聞のものもある	
	ツツジ	常緑	あり	"		川島町に自生	
	アラカシ	常緑	あり	"		川島町に自生	
	アサギ	常緑	あり	"		川島町で見ていないが天山市等に自生	
	ツツジ	常緑	あり	"		川島町で見ていないが一宮市等に自生	
	クヌギ	常緑	あり	"		川島町で見ていないがこの地方に自生	
イチイ	常緑	なし	そのまゝ食用		川島町で見ていないが一宮市等に自生		

## 6. 常 緑 樹

常緑広葉樹は堅くて丈夫で表面に光沢のある葉のものが多いので、その林を照葉樹林という。岐阜県では岐阜市金華山や美濃市鶴形山に大規模のものが残る。特に鶴形山はこの地方に於ける照葉樹林の北限である。植物の花粉はその外膜が化学変化に強いので、他の部分が腐敗分解しても花粉だけは分解せずに泥炭層等では残っている。その為古い地層に残る古代の植物花粉の分析を過ぎての植生や環境の歴史を知ることが出来る。この方法で塚田雄雄氏は今から約1500年前の弥生時代にこの地方では急速に森林が焼きはらわれて農耕地にされたと推定した。それまでは一面にシイやカシの照葉樹林でおおわれていたのである。縄文時代までの人々は多くはこの林内で生活を続けていたわけで、いわばこの森林は日本人のふる里であり、中尾佐助氏はここに発達した農耕文化を照葉樹林文化と呼ぶ。この林の残存が各地に点在しており、その小規模のものが鎮守の森である。ところがそれが1959年の伊勢湾台風以後ひどく破壊され、森と呼べない程になってしまった。川島町内の各社も植えた樹が少数あるだけの所が多い。ただ松倉町の神明神社（小島のお宮）にはごく小規模の照葉樹林が見られる。

### (1) マンリョウ（ヤブコウジ科）

暖帯の林床に分布する低木で、観賞用に庭にも植えられる。白生のものは河田町や松倉町の森林内に見た。葉は長楕円形で先が尖り、波状の鋸歯があり歯間には肉腺体がある。花は7月上旬の枝先に分枝して数十個開ける。果実は赤く熟して晩秋から冬にかけて美しい。時に黄か白色になるものもある。同属のカラタバナに百両という俗名があり、本種は万両、別のセリョウ科のセリョウ（千両）と縁起の良

い名前で好まれる。和名は似ているが、マンリョウとセリョウは系統的には異なる植物でセリョウは被子植物の中でも原始的な仲間である。

### (2) アオキ（ミズキ科）

林内に最も普通の雌雄異株の低木で町内各所にある。枝まで緑色をしているのでアオキという。葉は長楕円形で対生し、まばらに鋸歯があり質厚く押葉にすると色が黒くなる。春に紫褐色の4弁花を開く。雄花は大きな花序で多数の花を着けるが、雌花の花序は小さい。花後卵形の果実が赤く、赤く熟した葉の間にちらついて美しい。ふりり等の園芸品種が多い。

### (3) ヒサカキ（ツバキ科）

サカキがない所は神社にヒサカキで代用する。サカキより葉が小さく縁に鋸歯がある。3〜4月この附近の里山へ行くとヒサカキの花が咲き特有の臭いがする。私は毎年この香りで春が来たことを感ずる。雌雄異株で、雄花には多くのおしべと退化した子房が時に着く。雌花にはめしべがあり時に不稔のおしべが少数ある。また両性花の株もある。液果は熟すと紫黒色になり染料に用いる。河田町等の林内に見た。

### (4) サカキ（ツバキ科）

暖帯林内に普通にあるが神社にも植えられ、神社に使われ樹と書く。サカキの特徴は冬葉が狭で疎のように曲り鳥の爪状をしていることである。葉は長楕円形でヒサカキと違って鋸歯はない。花はヒサカキより大きく6〜7月に葉の基部から下向きに咲く。両性花で秋には黒色の果実になる。川島町内のどの神社にもあった。

### (5) クスノキ（クスノキ科）

暖地には野生するが、この附近にあるものは植えられたものか、それが野生化したものである。ヒヨドリ等により種子がよく散布されて野生化し、病害虫も少なく大木になったものが多

い。河田町の八幡神社には大木が数本ある。葉や材には精油があり樟脳が含まれる。葉を切ってもむと樟脳の芳香がある。葉の裏の葉脈の分岐点には小さなふくらみがあり、ある幼虫が入っている。花期は5〜6月で円錐花序が見られる。

### (6) ヤブニッケイ（クスノキ科）

昔駄菓子屋で売っていたニッケイ（ニッケイの細根）や葉子の「八つ橋」に使うニッケイの野生種である。ニッケイは栽培種でエーザイの薬用植物園にあり、また野生化したものもあり、一宮市の神社等で見ている。ヤブニッケイは暖帯の照葉樹林にはどこにも見られるもので、



ヤブニッケイ

ニッケイに比べて芳香が少なく、葉形もニッケイ程先が細くならない。クスノキの葉にも似るが、葉脈分岐点の虫の出るふくらみがない。6〜7月頃本年枝の葉基部から長柄のある花序を出す。松原町神明神社では8月に既に小さな果実になっていた。

### (7) サネカズラ（モクレン科）

川島町の山林内には多く、常緑のつる性の樹で他の樹に巻き着いている。別名をピナンカズラと呼び、葉巻を細かく切り温水中に浸すと粘液が出て、これが整髪液になり美男子をつくる。葉は互生し表面に光沢があり、裏は時に紫色を帯びる。雌雄異株で、雌株



サネカズラ

には秋になると赤色の大きな実を着ける。赤い腹頭を思わせる果実が林の中で目立つので、サネカズラ（実頭）という。これは薬用になるのでエーザイの薬用植物園で栽培され、11月には多数の果実が実りにふら下っている。

### (8) スダジイ・ツブラジイ（ブナ科）

照葉樹林の代表木で、例えば岐阜市の金華山は全体がシイの大群落である。川島町では僅か神社に残るだけで、松倉町の林業神社等で見える。果実の長いほうがスダジイ、短かく円いのがツブラジイで、下に落ちた果実を見て区別する。果実は他のどんぐりより小さいが、渋味がないので食べられる。カシの類と違ってシイは葉が枝に斜左右に2列に並んで出る。花は5〜6月に咲き、雌花と雄花があるが開花に着く。花からは特有の強い香りを放つ。先年三河地方の国道をバスで通った時、バスの中までにおって来たことを思い出す。

### (9) アラカシ（ブナ科）

カシとは堅い木でかたしが通ったものが多い。カシには堅種があるがその中でも一番多いのがアラカシで、葉は長楕円形で上半部に鋭い鋸歯がある。果実（どんぐり）は年内に熟し、縄文時代には食糧となった。その証裏に遺跡からどんぐりが発見されている。私も終戦後の食糧難時代に食べた経験がある。シイと違って渋味で強いので製粉してから水でよくくらし渋味を



アラカシ

抜いて食べたが、まずい味で二度と食べる気はしない。材は木炭に適し、器具等をつくる。

(10) シラカシ(ブナ科)

アラカシの次に多いのがシラカシで、和名は材が白いことからつけられた。アラカシより葉が細く、鋸歯は多いがあまり鋭くない。人家に植えてあるものはアラカシよりシラカシのほうが多い。どんぐりはアラカシと同じく年内に成熟する。同じカシでも、アカカシ、ツクバネガシ、ウラジロガシ、ウバメガシは翌年秋に成熟する。アラカシもシラカシも材が堅いので農耕具の柄等に利用され、川島町ふるさと史料館にカシ製品の古いものが保管されている。一宮市萩原町には佐藤一英氏が努力されて、樫の木資料館が設置された。



シラカシ

## 7. 帰化植物

帰化植物は自然の力でなく人為の力で意識的または無意識的に移入された外来植物が、日本の土地で野生状態になっているものをいう。植物は自然の力すなわち風、水流、鳥獣虫等により種子や胞子が遠方まで運ばれ分布を広げていく。ところが人間は長い間に衣食住の材料として外国から意識的に植物をとり入れた。またその植物の種子や苗に他の雑草の種子が混入して一緒に入ったり、輸入荷物のこん包に付着して無意識的に入ってきたものもある。古い時代に有用植物としてとり入れたものがその後使われなくなり、捨てられて野生化したものもある。また有用植物に着いて入ったものがそのまま日本の気候風土に適応して今では日本古来のものより繁栄しているものが多い。よく帰化植物を目的のかたきにして、例えばセイタカアワダチソウをほく滅する会等をつくり、グループで除草をしている所があるが、勿論それは結構である。しかし帰化植物は在来植物のない裸地に入りこむのであって、在来植物が順調に生育していれば入らない。だから在来植物が生きられないような都市砂漠では、せめて帰化植物に来てもらう、人間に酸素を与えてくれればよいという考え方もある。強い帰化植物しか生きられないような悪い環境をつけたらの方が、開発の為に止むを得ないかもしれないが反省すべきである。

ある地域に帰化植物がどれ位あるか。それをめやすとして自然に対する人為の加わり方の程度を表わすことが出来る。その土地にある植物の全種類に対して帰化植物の種類数を百分率で示したものを帰化率という。

$$\frac{\text{帰化植物数}}{\text{全自生植物数}} \times 100 = \text{帰化率}(\%)$$

### 川島町と濃尾平野各地の帰化率 (佐藤 謙)

阿蘇園	川島町松倉町松原町	'87. 9.15	20.9%	森本中央公園	一宮市丹波町森本	'82. 4.24	29.5%
南森川右岸川原	川島町豊町河田町	'88. 4. 2	13.2%			'82. 7.22	81.2%
南森川左岸川原	川島町河田町小瀬町	'88. 5. 1	23.4%			'82.10.22	26.3%
笠田町東原草	川島町笠田町	'88. 9.18	29.0%	同上	同上	'86. 8.26	88.4%
本管川左岸川原	一宮市北方町	'82. 9.26	24.4%			'86. 7.24	32.2%
本管川右岸川原	羽島市正木町	'81.10.25	22.2%			'86.11. 1	28.0%
本管川左岸川原	祖父江町鈴野	'82. 4.25	33.8%	彦田公園	一宮市大和町彦野	'87. 1. 6	33.3%
同上	同上	'83. 8.22	25.7%	同上	同上	'87. 8. 1	28.6%
大管川右岸川原	羽島市桑原町	'82. 9.15	24.7%	万葉公園	一宮市森田町戸野	'87. 3.24	21.0%
本管川トンビ池	笠松町舞鶴寺	'84. 8.30	17.0%	造池地	稲沢市大塚町	'76. 6.16	20.3%
長良川左岸川原	羽島市瀬井町	'86.11. 2	33.3%	J良緑地斜面	稲沢市陸田町	'88. 5.21	28.8%
長良川左岸川原	岐阜市島島	'87. 8.28	31.2%			'88. 7.25	26.4%
学校運動場	稲沢市大塚町	'82. 9.14	35.0%	同上	同上	'88. 9.11	20.6%
同上	同上	'86. 4.24	32.4%	休耕田	稲沢市と一宮市	'85. 9.15	83%
大平島公園	一宮市朝日	'86. 8.10	22.2%	定光寺山	龍戸市定光寺	'82. 9.23	2.5%
同上	同上	'87. 3.28	34.8%	金城頭	名古屋市西区	'82. 7.23	41.3%

美濃濃尾の各地について調べると、20~80%の所が多い。すなわち4~5種の内1種が帰化植物というわけである。今までの最高は名古屋市長城崎町の41.3%、最低は龍戸市定光寺町の2.5%である。港は外国から荷物が輸入され、それに種子が着いて来るので一般に率が高くなる。それに対し定光寺の森のように在来植物がスクラムを組んで固めている所は入り込む余地がないから、率が低い。川島町内での帰化率は南沢川の同田橋下流で13.2%、上流で23.4%、笠田町草場で29.0%、河津湖で20.9%と濃尾の他地区とはほぼ同じである。町内の帰化植物は約75種で、うちキク科が23種あり最も多い。キク科は多くの

種子をつくり粒が細かく風に飛ばされやすく、散布に都合がよくからである。

(1) **ブタクサ(キク科)**

一見ヨモギに似ているがヨモギは多年草だから根が発達しており中々抜けない。ブタクサは一年草だから根が小さく簡単に抜ける。ブタクサとは英語名を直訳したものだがいにもあわれな和名で、荒地に花び粉の原因になるので困りものである。葉は葉の下方では対生、上方では互生となり、2回羽状に深裂する。花は雌雄の別があり雌雄同株である。夏に穂状花序を出し、多くの雄花が生着する。雌花は雄花序の基部にある苞葉にかくれて2~3個ずつ着く。それが結実して散布され増殖する。北米原産で日本へは明治初期に入ったが、定着したのは昭和初期である。川島町内の川原に帰化する。

(2) **オオブタクサ(キク科)**

別名クワモドキという程、クワノキ位の大きくなり、ブタクサよりもっと厄介な草である。



普通高さ2~8mだが原産地の北米では何と6mにもなるという。それが一年草だから成長速度は大変なものである。葉はクワに似て掌状に8~5裂し両面



オトプクサ

毛ざらつく。雄花は穂状に着き、雌花はその下に着くのはブクサと同じである。果実もブクサより大きく、どんどん繁殖する。笠田町の畑で見たものは高さ2.5mにもなり下部はまるで樹のようで、多量の花粉をまき散らしていた。

(3) キダチコンギク(キク科)

戦後の朝鮮動乱(1950~58年)の頃、軍需物資と共に北米から九州に入ったという。小野木三郎氏の各務原市の記録では1966年頃から飛行場周辺に少しずつ見られるようになった。秋を代表する野菊といえばノコンギクやヨメナであり町内にもいたる所に自生する。最近はその等より多くなったのがキダチコンギクで、花はヨメナより小さいが多く密集して咲くので美しい。その為庭に植えられている所もあり、生花用にも使われる。多くの枝が茎に対し直角につき茎の下部は木質化する。

(4) オオキンケイギク(キク科)

北米原産で最初は庭園に植えられていたが、その後野生化した。笠田町の草地に特に多く花時には、木曾川を隔てて対岸から黄花の群落が見える程である。葉は3裂するものが多いが上方のものは分れない。舌状花は橙黄色で花冠の先は大小不同に4~5裂し、筒状花も同じ黄色である。花期は初夏だが一部は秋まで残って咲く。

(5) ベニバナボロギク(キク科)

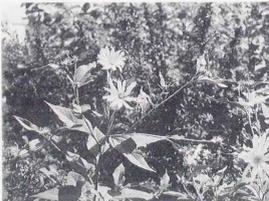
アリカ原産の花1年草で、戦後もまもなく九州で発見されその後北上して今は各地に広がっている。葉は高さ50~80cm、柔かくて液汁に富む。この種の特徴は花がみな下向いて咲くことである。舌状花はなく、筒状花は長い管状で下方は白色、先の方は赤れんが色である。めしべの先が2裂し、それぞれが長く伸び後にくるりと巻くのもこの種の特徴である。花期は8~12月で、松倉町の神明神社(小島のお宮)境内等で見た。

(6) ダンドボロギク(キク科)

北米原産の1年草で、1988年愛知県産戸山で発見されたのでその和名がつく。段戸のほろぎれのキクの意で外見上もまことにあわれな姿で探って押葉にする気もおこらない。ベニバナボロギクのように花は下向きに垂れることなく直立する。まためしべの先が2裂してもくると巻かないのでベニバナボロギクとは別個にする。花期は8~11月で、小網町の神明神社、北山町の川原等に特に多い。

(7) キクイモ(キク科)

北米原産で江戸末期に渡来する。戦争中にもを飼料や果糖、イヌリン、アルコールの原料として栽培を奨励したこともあって全国的に野生化している。町内にも多く例えば松倉町の道



キクイモ

端には小群落が見られた。高さ1.5mから時に8mにもなり、巨大な黄色花が咲く。茎や葉は著しくざらつき、葉は上部では互生、下部では対生になる。多年生で地下に大きな塊茎(いも)をつくり、イヌリン等の炭水化物が蓄えられる。

(8) オオオナモミ・イガオナモミ(キク科)

両種とも1年草で、秋になると道端で先の曲った刺のある果実を見るので、一般によく知られている。その刺、くちばし状突起、果面に毛が多いのがイガオナモミで、ほとんどないのがオオオナモミである。果実はイガオナモミのほうが大きい。オオオナモミは北米原産で1929年岡山県に帰化した記録がある。イガオナモミは南北米、南欧、ハワイに広く分布するが原産地は不明である。笠田町北の運動場付近には両種共特によく、昔の子供はこの果実を衣服に付けて遊んだが、高級玩具で遊ぶ現在では見向きもされなくなった。



イガオナモミ

(9) キキョウソウ(キキョウ科)

葉が階段状に着くので別名をダンダンギキョウともいう。葉は無柄で心臓型の基部で茎を抱く。花はキキョウに似てそれより小さく鮮紫色で帰化植物にしては割に美しい。果実は円筒形で5がく片が残る。変わった特徴は果実の中央部に3個の楕円形の穴が突き、それ以上から垂れ下がる蓋まで着いていることである。北米原産で、初夏町内の川原を歩くとき多数帰化し目立つ。



キキョウソウ

(10) アレチワリ(ワリ科)

北米原産の1年生つる草で、川原に大群落をつくる。北山町の川原ではクズのつると共に樹上までは上がる。アメリカからの輸入大豆に混っていた種子が捨てられ広がりはめづらしい。葉はキウウリ等に似ており、最初木曾川町の川原で時栽培ワリの野生化したものと聞いた。ところが花や果実を見本種とわかり特に棘の生えた果実は特異でこれに似たものは日本にはない。木曾三川の川原以外に鹿尾平野ではまだ少ないが、やがては広くおおいっすようになるかも知れない。招かざるものが入り迷惑しているが、逆にアメリカへ日本のクズが入って厄介視されており、お互い様ということか。

(11) オオファバムグラ(アカネ科)

北米原産の1年草で乾いた砂地を好み、木曾川川原では各所に見る。川島町内の川原にも群落をつくる。葉は無柄で対生し粗長く先は尖る。上下面とも短かい硬毛があり葉縁はざらつく。葉の基部の托葉は左右が合して上縁に数本の棘がある。夏に白~淡紅色の花が咲く。花も無柄で葉の基部に着き花冠の先は4裂する。子房下位すなわち花の下に子房があり果実となる。果実になっても上に、がく4枚が残存する。



オオフタバムグラ

(12) ツボミオオバコ・ヘラオオバコ

(オオバコ科)

小学生の頃運動場のオオバコの花茎で引っ張りあいをした懐かしい草だが、その帰化種がこの地方に2種ある。川島町の川原には在来のオオバコと帰化種のうちツボミオオバコが多くヘラオオバコは少ない。帰化種は在来種より葉が長く、在来種が多年生であるのに対し1~2年草である。ツボミオオバコはヘラオオバコより白色毛が多いが花序があれば確実にかかる。

(13) マツバウンラン(ゴマノハグサ科)

最近川原や道端等に増加した北米原産の1~2年草である。葉が松葉のように細く海岸に生えるウンランの類ということでこの名がつく。入ってきたばかりの頃早春の葉だけのものを、一宮市の公園で見て何かと迷ったが、5月頃に



マツバウンラン

なり開花して本種とわかった。もう少し花が大きいと青色花で観賞価値があるが、それでも群生すると帰化種にしては美しい。川島町内の川原ではどこにでも見られる。在来のウンランは黄白色の花でもっと大きく、京都府の丹後海岸で見た。

(14) ビロウドモウズイカ(ゴマノハグサ科)

ヨーロッパ原産の2年草で、庭に植えたりした野生化しているものもある。茎は高さ1mにもなり大型で、全株が灰白色の綿毛でおおわれる。夏から秋にかけて茶葉に黄色の花を多く着ける。モウズイカとは異なり(おしべ)に毛が多いことをあらし葉がビロウド状の意味である。川原に点々と帰化しており例えば松倉町等で見えた。

(15) ウルナスビ(ナス科)

ナス科というた、ナス、トマト、ジャガイモ等食用になりタバコ、ハシロココロのように有毒だが別の面で役にたつ有用植物が多い。とこ



ウルナスビ

ろが本種は刺があって嫌われものの殆ど悪い雑草で、しかも繁殖力は非常に強い。養老町の指栗川堤防で一面の大群落を見たが、川島町では松倉町の堤防で小群落を見た。葉も花もナスに似ており果実だけは小さく径1.5cmの球形である。北米原産のもので、植物好きの私もこれ等はありません。

(16) アレチハナガサ(クマツヅラ科)

パーベナの類は園芸植物として美しいものが多いが、本種はパーベナ属でも背丈はかり高くなって見にくい雑草である。よく似たヤナギハナガサのほうは花がやや大きく顔に植えることがある。木曾川川原では各所に帰化し、川島町内でも純群落をつくる所がある。ヤナギハナガサは町内には野生化していない。アレチハナガサでは葉は対生で著しくざらつき、葉縁には大小不揃いの深い鋸歯がある。花は小さく淡紫色で、がくの先は5裂し下に1包葉がある。南米原産で、戦後日本に帰化した。

(17) アメリカネナシカズラ(ヒルガオ科)

1年生の寄生植物で、川原には点々とあり草の上にラーメンを捨てたように見える。松倉町でミツツバに、また笠田町ではメドハギに寄生



アメリカネナシカズラ

しているのを見た。在来のネナシカズラはめしへの先が1本で、つるが太いが、本種はめしへの先が2つに分かれ、つるが乾燥したラモンのように細い。葉はなく光合成はしないで、つるの所々から寄生根を出し宿主の体に入れて養分を吸う。宿主は特定の植物とは決まっておらず、何でも附近にあるものに巻きついている。北米原産で輸入殺虫剤が防除植物の種子に混入して来たものと思われる。

(18) ママサガオ(ヒルガオ科)

この類は野生の帰化種が多く、観賞用のアサガオと違って花は小さく、種によって花の形や着き方、果実の形等様々である。葉の形はどの種も大同小異で、葉だけでは種の区別は出さない。本種の葉は長卵形で先が段々細まるものが多いが、時に浅く8裂するものも出る。1つの花枝に1~2個、稀には数個の花を着ける。花の色は白~淡紅色、上から見ると五角形~星形で、別種のホシアサガオと間違えることがある。果実は上下にやや扁平になった球形で、ホシアサガオの上下に長い球形と区別出きる。またホシアサガオに較べて花柄のほぼ伏突起が著しい。9月に北山町の川原で見えた。

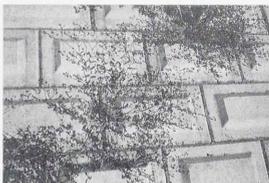
(19) アレチマツヨイグサ(アカバナ科)

北米原産の2年草で、日本に入っているマツヨイグサの中では本種が最も多く見られる。木曾川川原にはどこにもあり、冬にはゼット状の根生葉が見られる。葉の先は尖り多くの波状の鋸歯がある。春になると茎をのぼすが茎上の葉は鋭く尖り中央脈の上面は多少隆起を帯びる。夏に径2~3cmの淡黄色の花を着ける。温帯地方に多く帰化するオオマツヨイグサに比べて花が小さくあまり美しい。果実は4裂して種子を出す。

(20) オオニシキソウ(トウダイグサ科)

園芸植物で有名なユーロペルバ属(ポインセチア、ハナキリン等)の雑草である。同属のコニシキソウは裸地のどこにでも見られるが、本種はそれよりも全体に大きくオオニシキソウと名がついた。コニシキソウと違って川原以外ではあまり見かけないが、川原には多くコンクリート壁の隙間でさえたましく生きている。北米原産の1年草で、葉は対生で長楕円形をしており基部は左右が不揃いである。花序は夏から秋にかけては茎頂や枝の分岐点に着く。果実は横

から見ると三角状卵形で、上から見ると正三角  
形となる。



オオニシキソウ

(21) アメリカフウロ (フウロソウ科)

漢字で書けば北米原産の風露草だがフウロの  
語源は不明である。葉草のゲンショウコと同  
属で、ゲンショウコは町内で見えないが、  
本種は道端等に多く帰化する。アメリカフウロ  
は1年草で(ゲンショウコは多年草)茎は若  
いうちは直立するが後に斜上または平伏する。  
葉は掌状に基部近くまで5~7裂し対生する。  
花は小さく淡紅色で、細長い果実は5裂して中  
から種子を出す。

(22) イタチハギ (マメ科)

帰化植物はふつうは草だがこれは落葉小低木  
である。町西端の運動場附近に群生する。葉は  
互生し、1枚が6~12対の小葉が集った奇数羽



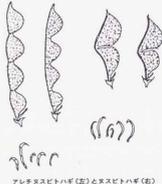
イタチハギ

状複葉となる。花序は多数の紫黒色の花が集ま  
るので別名をクロバナエンジュともいう。果実  
は長さ1cm弱で1個の種子を入れる。戦後砂防  
用として各地に植えられたものが広く野生化し  
た。ふえ過ぎて本来の植生をこわすおそれがある  
ので自然保護地での乱用は注意を要する。花  
や果実のない幼樹は、堤防斜面に多いクララと  
見取りやすい。草本のクララに対し、イタチハ  
ギは木質だが幼時はわかりにくい。花や果実が  
あればそれは他の日本産マメ科にない特異な形  
をしているので本種とすぐわかる。

(23) アレチヌスピトハギ (マメ科)

アメリカから日本へ入り、今ではどここの道端  
にも見られるアレチヌスピトハギは少なくなり、  
町内では産場橋の南の林内で僅か見ただけであ  
る。両種ともに果実の表面に曲った毛が多くあ  
りこれで衣服や動物体に着いて散布される。ア  
レチヌスピトハギの果実は4~6節にびり、  
成熟すると節ごとに切れる。在来ヌスピトハ  
ギでは2節に分かれくびれがもっと深い。アレ  
チヌスピトハギの葉は3小葉からなり小葉は長  
楕円形で下面に毛が多い。

果実(豆のさや)と表面の毛



アレチヌスピトハギ(23)とヌスピトハギ(24)

(24) コメツツメクサ (マメ科)

別名をキバナツツメクサとも呼び、ヨーロッパ  
~西アジア原産で日本各地に帰化する。川島町  
内でも道端等が多い。ツツメクサとはオランダか

ら送られたギヤマン(ガラス)製の器が割れない  
ように詰め物にした干し草の意味で、一般に  
はクローバーという。この類は牧草によく日本  
にも多くの種が入っている。その中で本種はコ  
メツツメクサの名の通り体のすべてが小型のもので  
ある。葉は3小葉からなり、花は黄色で結れた後  
も果実を包む。花序は葉より長い枝の先に着き  
1花序は5~15個の花からなる。

(25) ムシトリナデシコ (ナデシコ科)

ヨーロッパ原産で江戸末期に渡来、庭園に植  
えられていたものが野生化し、川島町の川原に  
も多数見られる。今も観賞用に植えているので  
帰化植物というより園芸植物のほうが適当であ  
る。ムシトリというのは葉の節間部に粘液を分  
泌する部分があり、そこに小さな虫が付着する  
ことがあるからで、ムシトリスミレのような食  
虫植物ではない。葉は対生で、花は淡紅色に  
白色のものもある。



ムシトリナデシコ

(26) アメリカヤマゴボウ (ヤマゴボウ科)

別名をヨウシュヤマゴボウと呼び華にも目につく  
大型の多年草で、熟果は紫色の汁を含み、  
インキモモと俗称する。別種のヤマゴボウは中  
国原産で稀に栽培され山間部で野生化、私は長  
野県岡田村で見ている。土産として売っている

ヤマゴボウの味噌漬というのは全く別の植物で  
キク科のモリアザミのことである。中国原産の  
ヤマゴボウは果序が直立しているが、北米原産  
の本種は果序が下向きに垂れ下がり、すぐ区別  
出きる。

(27) ツルドクダミ (タデ科)

中国原産の多年草で、薬用に輸入したものが  
野生化したといわれる。地中の塊根は滋養強壯  
剤で不老長寿の薬効があるという。柞下地の北  
側の樹からみついていた。葉がドクダミに似  
た植物の意味だが、ドクダミとは全く別の  
植物である。葉柄基部にはタデ科特有のさや状  
托葉があって茎をとり巻く。秋に円錐状の花序  
を出し、多くの小さな白色の花からなる。5枚  
のがくの内8個が成長してひれ状になり果実  
を包む。

(28) ニワセキショウ (アヤメ科)

北米原産で明治時代に渡来した多年草で、川  
原に帰化し特に町西端の一宮市大日との境附近  
に多く見た。茎にはひれ(翼)があって扁平で、  
葉は直立し基部は左右に折れ曲って葉を包く。  
花を見ないで葉だけ見ると庭に植えるセキシ  
ョウに似るからこの名がつく。しかしセキシ  
ョウは花が全く異なるサトイモ科である。5~6  
月頃小形のアヤメ科の花を着け、花後小球形の  
果実が出る。各地の芝生の雑草にもなる。



ニワセキショウ

### (28) ハナヌカスカキ(イネ科)

ヨーロッパ原産の1年草で、木曾川堤防の芝生の中などに帰化し、町内では河田町の南深川右岸で見た。茎は細く多数が丛生し、高さは10~40cmとなる。葉も細く乾けば上面に巻くついで糸状となる。春から夏にかけて花序を出し、多数の花からなる。1つの花(小穂)の中には2小花があり、雄穎は1つだけあり、第2小花の雄穎にはのきは欠くものが多いが、第2小花の雄穎にはのきがある。欧米ではドライフラワーの材料にする。

### (30) メリケンカルカヤ(イネ科)

北米原産で戦後名古屋市中心に広がり出し、今ではどこにも見られる雑草である。冬枯れの荒地に群生する茶褐色の草を見ると何か寂しい感じがする。花期は秋で、茎に接する苞葉に隠れて2~4個の白毛のある花序が着く。花序は長さ2~3cmでその軸には多数の長毛がある。軸の各節ごとに1個の両性小穂と1個の無性小穂が着く。両性小穂は無柄で後に果実となり、無性小穂は柄だけ残り花は退化している。町内のいたる所に多く、例えば小網町の整地記念碑の周辺等大群落を見た。

### (31) ハルガヤ(イネ科)

ヨーロッパ及び温帯アジアに分布し、明治時代に移入し牧草シートバーナルグラスの名で栽培されたものが野生化し全国的に広がった。英名はスプリンググラスで和名のハルガヤと同じである。春に南深川の川原で見える。乾燥するとクマリンの香り(桜餅の葉におい)がする。その為他の牧草にハルガヤを混ぜると家畜の食欲を増進させるといふ。

### (32) シナダレスズメガヤ(イネ科)

各地に普通のカゼクサ、ニワホコリ、コスズメガヤ等と同属であり、別名セイタカゼクサともいふ。英名ウィーピングブルグラスの名で

広く知られており、南アフリカ原産で戦後砂防用に移入した。山岳道路や高速道路が各地に出る、そののり面に種子を吹きつけて崩壊を防いでいる。葉は毛髪のように細長く垂れ下がる。夏から秋にカゼクサに似て先に傾いた穂を出す。冬枯れても葉はそのままの姿で残っている。各地に野生化して大変な勢いで広がり、木曾川川原にも群落が見られる。

### (33) セイバンモロコシ(イネ科)

地中海沿岸地方原産で、1948年千葉県で帰化が見られ戦後各地に広がった。川島町内でも道端等各所に見られる。家畜の飼料になりジョンソングラスと呼ばれ、根尾川の川原で栽培されていたこともある。ただ若葉に青酸化合物を含み家畜が中毒をおこすことがあるという。栽培するモロコシと同属で、モロコシは1年草だがセイバンモロコシは多年草である。小穂は有柄のものと同柄のものが対になって着き、ともに1小花よりなる。有柄のほうはのきがあり雄性に結実しない。無柄のほうはのきがあり両性に結実する。



セイバンモロコシ

## 8. 水生植物

ふつう水草と呼ぶが、完全に水中に没していても水湿地に生育するものをこの仲間に入れる場合もある。例えば水田雑草は約200種と

いわれ、尾根平野の休耕田では約80種を記録したがこの中に広義の水生物植物に含めるものがある。ただ川島町内には水田がないので、水田に生育する種はあまり見られない。一般には、(ア)抽水植物、(イ)沈水植物、(ウ)浮葉植物、(エ)浮遊植物の4種類に分ける。(ア)は根と茎の一部が水中にあって、茎や葉の大部分が水面に突出しているもの。(イ)は水底に根がなくて、植物体全体が水中で生育するもの。(ウ)は水底に根や地下茎が固定しており、水面に葉が浮いているもの。(エ)は根や地下茎が固定されず、水面に浮遊しているものである。

水中生活での適応現象としては、陸上植物には見られない形質的な特性がある。根は陸上植物のように体を支える必要がないので完全に退化消失したもの(クヌギモ)、発育不良のもの(コカナダモ)がある。たとえ根があっても体を支えるための機械組織は発達しないものが多い。深い泥中に根茎を出すものでは酸素不足になりやすいので、ハスの根茎の通気道(レン

コンの穴)のような通気組織が出ている。茎は水流にまかせて流す為に細長く軟弱で、通気組織や海綿状組織が発達して細胞間隙が多くなる。葉も茎と同じく軟く、浮葉または気中葉と水中葉で形が異なるものがある。これを異形葉というが、ヘルムシロ類やキクモ等では環境により著しく葉形に違いが出る。陸上植物では気孔は葉の裏に多いが浮葉では裏にあっては役に立たないで表面にある。また沈水葉には気孔がない。受粉形式は虫媒、風媒のほか水媒があり、その1例として水面上で花柄がめしべに到達するセキショウモの場合を木曾川下流で観察した。結実が少くない水草では殖芽をつくって無性繁殖をする。晩秋に葉が短くなって殖芽となり水底で越冬する。翌春葉や根を出して成長をする。川島町は川に囲まれているので水草は多そうだが意外に少ない。1987年に調査した鉄砲川や河跡湖は水質汚濁で植生貧弱であり、川原にはほとんど水田がないので、他地域に比べて水草の種類は僅かである。

### 木曾川流域の主な水草

(ア) 抽水植物	(イ) 沈水植物	(ウ) 浮葉植物	(エ) 浮遊植物
ヘラオモダカ	ホザキノフサモ	○ ヒシ	○ ● ウキクサ
○ ● ヨシ	マツモ	○ ニビシ	○ ● アオウキクサ
○ ● ツルヨシ	フサジュンサイ	ヒメビシ	
○ ● マコモ	● エビモ	● ホソバミズヒキモ	
ミズガヤツリ	ヤナギモ	○ ササバモ	
○ ● サンカクイ	○ クロモ	○ アシカキ	
フイ	● コカナダモ	○ ヘルムシロ	
● カンガレイ	● オオカナダモ	○ ● ヒツジグサ	
● ガマ	● セキショウモ		
○ ヒメガマ	ホッスモ		
	キクモ		
	シャジクモ		

○ 川島町内で山本保雄氏記録 ● 川島町内で佐藤記録

(1) サンカクイ (カヤツリグサ科)

木曾川や南沢川の水辺やエーザイ工園前の水路に見られる抽水植物である。茎は高くきは0.5~1m、断面は三角形で中に隙間の多い髄がある。泥土中に地下茎が横に伸び各節から地上茎を出す。花序は数本の枝を分け、それぞれに2~5個の小穂が塊って着生する。サンカクイとは切り口が三角で花がイグサに似るからだが花の構造はイグサとは異なり、分類もイグサ科ではなくカヤツリグサ科に属する。



サンカクイ

(2) カンガレイ (カヤツリグサ科)

サンカクイが地下茎を伸ばし各節から地上茎を出すのに対し、カンガレイは地下茎がなく一株にまとまって地上茎が何本も出る。花もサンカクイには小穂に柄があるのに対し、カンガレイはなく地上茎に直接着いている。木曾川では



カンガレイ

サンカクイ程多くなく、低倉町の本流水辺で少数見ただけである。冬(寒)も枯れた茎が残るというのでカンガレイと名付けられた。

(3) ヨシ (イネ科)

アシともいうが悪しと聞えて縁起が悪いのでヨシ(良し)と改められたという。河口近くの塩分濃度の高い所でも大群落をつくる。川島町では鉄砲川に多い。イネ科の花の特徴として最下には第1苞穎その上の反対側に第2苞穎がありその上に1~多く的小花がある。ヨシの場合は2~4個の小花があり、第1苞穎の長さが最下的小花の長さの $\frac{1}{2}$ 以下であることが、次のツルヨシとの相違点である。



ヨシ(左)とツルヨシ(右)



ツルヨシ

(4) ツルヨシ (イネ科)

ツルヨシはヨシより上流地方に多く、川島町の川原には多い。しかし下流域の立田村(河

口より17km地点)でも見たことがある。ツルという名のように地上をほう茎が見られ、その節の部分に白い長毛を密生する。ヨシより幾分葉が細いようで、第1苞穎の長さは最下的小花の $\frac{1}{2}$ 以上ある。つまり花全体に対し第1苞穎が割に長い点がヨシとの区別点となる。

(5) マコモ (イネ科)

大形の水生多年草で、笠田町の北沢川で見える。属は別だがイネに近いもので、アメリカには日本のマコモに似たものがあり種は違っても同属で原住民の食糧にされる。マコモの葉は長く50~100cm、幅2~3cm。夏秋の頃大型の円錐状の花序を出し、上部は雌花序で下部は雄花序である。野生種だけあって脱落しやすい。栽培のイネは刈り取っても、もみが落ちないがこの性質は収穫量を出さるだけ多くする為に人間が長い間かかって改良した結果である。マコモはおそらく日本人の先祖の大切な食糧だったと思われる。

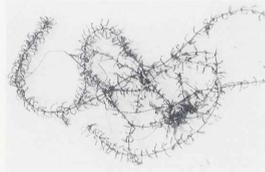
(6) セキショウモク (トチカガミ科)

和名の語源は葉の形がセキショウ(サトイモ科)に似ているからである。全国各地の湖沼や流水中に群生する沈水性の多年草である。エーザイ工園前の水路でエビモに混生していた。葉は線形リボン状で鈍頭、上縁にはあまり目立たない微鋸歯がある。雌雄異株で花柄は葉間から数本ずつ出る。代表的な水媒花で水面で受粉をする。根もとから走出枝を出し、所々に新苗を生ずる。

(7) コカナダモ (トチカガミ科)

アメリカ北東部原産で、昭和初期に植物の実験材料として輸入したものが逃げ出して野生化した。従って本種と次のオオカナダモは、前記の種化植物にも入る。今ではどこの水路や池等にも大繁殖し在来のクロモと交代しつつある。葉の裂片は再生力が強く、低温や流水再水にも

耐えるので、雌雄異株で雌株しか入っていないのに無性繁殖で急激に増加した。木曾川川原のどここの水溜りにもあるのに、不思議に川島町内ではあまり見かけない。1987年調査した鉄砲川や河跡湖でも水底に隠れているのかもしれないが姿を見せなかった。ただ大田の境のイタセンバラ造類地では見ている。葉は率によくつう8枚が生ずる。葉はやや硬く折れやすい。



コカナダモ



オオカナダモ

(8) オオカナダモ (トチカガミ科)

アルゼンチン原産で、大正時代に実験材料としてアメリカから輸入それが野生化した。外来植物のとり扱いは注意が必要で、日本古来の植生が破壊されてしまうおそれがある。コカナダモと同様雌株だけが入り、夏期水上に伸びて咲く花を見るのが繁殖には役立たない。もっぱら葉の破片が成長する栄養繁殖で増殖する。木曾

川川原の各所に見られるのに、これも川島町内には意外に少なく、大日との境のイタセムバラ造殖地で見ただけである。コカナダゴより大型で葉は4枚(3~6枚)輪生する。葉も大きく丈夫で折れにくい。

(9) ホソバミズヒキモ(ヒルムシロ科)

水路や池等にも最も普通の多年生水草で、笠田町の北沢川やエーザイ工園前の水路で見える。葉は分枝し細く径0.8mm。水中葉も糸状で長さ8~5cm、幅0.3~0.5mmで、浮葉は稀に見るが長楕円形長さ約2cmである。花序は6~9月に出す。本種の果実の背面にはあまり顕著でない突起がある。この突起がニワトリのときか状に著しくなるものがあり、これをコバノヒルムシロという。これは栄養体だけを見るとホソバミズヒキモによく似ていて間違いやすが、コバノヒルムシロは非常に分布の少ない珍しいものである。

(10) エビモ(ヒルムシロ科)

ごく普通の沈水性多年草で、ウキクサやアオウキクサを除けば最も多くの場所を記録される水草である。清流から汚水域まで広い範囲で生育出来る。エーザイ工園前の汚れた水路で群生を見た。細長い葉が上下に波うっているのが特徴である。夏に花序を出す、花のほかに莖芽が無性的に大繁殖出来る。角野郎康氏によれば主に川等の流水域にあるものは1年中エビモが生ずる過年度の生活環をもつ。莖芽は5月から10月まで形成され7月から11月まで発芽が続く。ところが池等の止水域のほとんどものは夏休眠型の生活環をもつ。夏は浮葉植物が水面をおおってしまうので、その間は休眠する。秋から翌年初夏までの生活で、莖芽は5~6月に形成され夏中水底で過し、浮葉植物が枯れ始める秋に交代して発芽しエビモの体に成長する。つまり浮葉植物と季節的なすみわけをする。

(11) ガマ(ガマ科)

因幡の白兎の話に出て来るガマは各地の水湿地に広く分布し群生していることが多い。三ツ屋池の西側や笠田町西部の水湿地等でソーセイ型の穂を見かけた。ガマの花粉は漢方薬として使われ止血剤や利尿薬となる。歌にある他郷にくるまるのは涙りのようで、花粉の上ところがったほうが外傷にはよいのである。この仲間には、ガマ、ヒメガマ、コガマの8種があり、木曾川では8種とも見ているが、川島町ではガマだけを見た。

9. 在来の子葉草本

シダ植物 { 裸子植物 { 単子葉植物  
種子植物 { 被子植物 { 双子葉植物

花の咲く種子植物のうちで、めしべの中の胚珠(将来の種子)が子房(将来の果実)に包まれているものを被子植物という。それに対し胚珠が裸出して、子房のないものを裸子植物という。裸子植物は数が少なく、クロマツ、スギ、ヒノキ、イチチョウ、ソテツ等がこれに入る。その他大多数は被子植物で、そのうち子葉が2枚で葉脈が網状になる類が双子葉類である。ここでは双子葉類の樹木と帰化植物を除いた雑草をとりあげる。木曾川川原には川原特有のカワラホオコ、カワラヨモギ、カワラニンジン科、カワラサイコ等があるがこれ等も含まれる。つる植物も多く、ノブドウ、エビヅル、ヘクソカズラ、センニンソウ、クズ、ノアズキ、ガガイモ、カラスウリ、イシミカワ等が見られる。

(1) コウゾリナ(キク科)

木曾川川原の各所に見られる多年草で渡町等で見える。葉は葉とともに赤褐色の剛毛が生え、ざらつく。剛毛を顕微鏡で見ると先が2またに分かれていかりの様になる。その為この草に触

れると、剃刀の刃でひげをそる時の感じがするところから、顔そり草と呼びそれがコウゾリナになったという。タンポポに似た黄色の花は割りに美しく、川原ではよく目立つ。花期も7~10月と長い。



コウゾリナ

(2) カワラヨモギ(キク科)

川原に多い多年草で、春の根生葉と花時の葉とは形が違っており、別種のように見える。春川島町の川原を歩くと、昨年の地上部の残りや、葉と白毛におおわれた今年の新根生葉が一緒に見られる。8~10月の花時には、裂片が糸の様に細い無毛の葉に変わり、根生葉は枯死してしまう。頭花は径2mmで小さい。



カワラヨモギ

(3) ノコンギク・ヨメナ(キク科)

この両種等を一般に野菊という。川島町の川原や草地に多い。花がないと両者は区別しにくい、花があればノコンギクには冠毛があるがヨメナでは冠毛は肉眼では見えない程小さいからすぐわかる。キク科は見かけ上の1つの花は多くの周辺部の舌状花と中央部の筒状花の集合である。両種とも舌状花は淡紫色で、筒状花は黄色である。



カワラホオコ

(4) カワラホオコ(キク科)

川原の砂地に多い多年草で、川島町内でもよく見かける。からだ全体が白毛をかぶり、葉は細く幅1.5mm位で縁は裏側に巻く。裏面には特に白毛が多い。夏茎上部が分枝し先に白色の頭花を多数着ける。和名通り川原だけの植物と思っていたら、私の住む福沢市の宮田用水に沿う道路端にも1株だけが生じていた。

(5) ツリガネニンジン(キキョウ科)

北山町の木曾川左岸の堤防斜面で見える。地下の太くて白い根がチョウセンニンジンに似ており、花は青紫色で釣鐘状をしているのでこの名がついた。葉を切ると白い乳液を出す。根生葉は花時には枯死し、茎に着く葉はふつうは3~4枚ずつ輪生する。根生葉は円形で茎葉とは形が異なり同一植物とは思えない。春の若芽は乳液が出るのでチチナとか、信州等ではトホキと呼び山菜にする。

(6) アマチャツル(ワリ科)

テレビでアマチャツル茶の宣伝をしており最近有名になった。生葉をかむと苦みとともにかすかな甘味があるのでこの名がある。葉は5小葉に分かれ鳥の足あと状になる。この形はブドウ科のヤブガラシに似るが、葉の質がより薄く葉の上面に短毛があるから区別出来る。雌雄異株で、雌株には黒緑色の果実が出る。北山町の樹陰や松倉町の川原のテトラポットの間に見た。

(7) カワラマツバ(アカネ科)

川原に生え葉が松葉のように細いのでこの名がついた。葉は茎に8〜12枚が輪生し光沢があり肉線は下面に向けてそり返る。花序は円錐形で7〜8月頃密に白い花を付ける。花の中の子房は2つの球を接した双球状となる。中には黄色の花のものもありキナカワラマツバという。松倉町の川原に多い。

(8) イヌホオズキ(ナス科)

南北半球の熱帯から温帯にかけて広く分布し、日本では古い時代にわたるいわゆる原始植物である。1年生の有毒植物で空地や校庭の隅にいくらかもあるので危険である。例えば小網町の運動場にもあった。しかし円い楕円形でふつう少数の波形の鋸歯があるかまたは全縁である。

(9) ミゾコウジュ(シソ科)

夏から秋にかけて赤花が咲くサルビアと同属で、これは5〜6月に淡紫色の唇形花を開く。二年草で冬には大形のロゼット状根生葉がある。葉は断面が四角形で、花時には根生葉は枯れる。葉葉は楕円形で短い柄があり葉面にじわが多い。和名のミゾ(溝)のように南派川の遡った所に

点々と自生する。本種はかつては水田のあぜ等にあっただけだが農薬の影響かと思うが今では少なくなった。

(10) カキドオシ(シソ科)

道端にふつうにある多年草で、シソ科に多い香氣がある。茎は断面が四角形で、春には直立しているが夏になるとつる状に伸びて、垣根を通りぬけることからカキドオシという。葉は卵円形で基部は心形、鋸歯の形は円い山形で葉の裏には腺点が散在する。花は淡紫色の唇形花で濃紫色の斑点がある。別名カントリソウと呼ぶのは子供(虚弱体質)をとるの意で昔から民間薬に利用された。各所にあるが笠田町の木流右岸等で見える。

(11) セトギソウ(セリ科)

林の中や葎かげに生える多年草で、葉はほとんど根生する。葉面は無毛の卵状三角形で2〜8回8出複葉となる。4月頃葉の間から茎を出し、先にセリ科特有の散形花を開く。果実は長さ3mm程で2果実に分かれ、分果の断面は円形〜五角形で油管はない。セリ科は葉の形等は皆似ているが、果実の形がそれぞれ異なり分類の決め手になる。暖地の竹藪等で見た。

(12) オトギリソウ(オトギリソウ科)

弟切草の意味で、鷹匠の兄が秘密にしていたタカの家伝の傷薬をその弟が他人にもらした。その為兄が怒って弟を切り殺したという平安時代の伝説からつけた和名という。葉は対生で、鋸歯はなく、すかして見ると細かく油点が散在する。油点の中に赤い色素が多くあると黒点に、少ないと赤い点に、ない時には透明な点に見える。この特徴は花がない場合や若い苗でオトギリソウと見分ける時のポイントになる。夏から秋にかけて茎頂に黄色の花を付ける。おしべは多数で基部で合生して8グループに分かれる。観音木のビヨウヤナギやキンシバイもオトギリ

ソウ属で、同じ属で木と草と両方が含まれるのは珍らしい。河田町の南派川川原で見た。

(13) ノブドウ・エビヅル(ブドウ科)

よく似たつる草が2種松倉町等の川原ではいっしょに生えている。同じブドウ科だが属は異なる。ノブドウ属のノブドウは葉が3〜5裂し基部は心臟形になる。変異が多くなるほど深く裂けるものも別り別の植物かと思うが同じ種である。夏にも葉の対生の位置に花序を出すのが、食用になるブドウ属と違って先が尖らない集散花序を着ける。果実は球状で淡緑白色から紫色に青色に変わり、食べられない。エビヅルは食べられるブドウ属で木本に入れる場合もある。エビヅルは葉の裏に白色〜淡茶色の毛を密生する。これも葉はノブドウに似て浅く8裂するものから深く5裂するものまで変異が多い。花序はブドウ属だから先の尖った円錐花序である。この属には栽培のブドウをはじめ野生のヤマブドウ(この地方にはない)やギョウジャノミズがあり、食用になる。

(14) エノキグサ(トウダイグサ科)

エノキの葉に似ているのでエノキグサという。畑や道端によく見られる1年生で、史前帰化植物といわれる。この語は前川文夫氏によりつけられ、有史以前にイネについて日本に入ったものが多い。これ等は江戸時代後期以後に入ったことが確実な帰化植物とは区別している。エノキグサは8〜10月頃、葉の基部に穂状花序を出しその下には苞葉が出る。これが2つ折りになった扁笠状をしているので別名をアミガソウともいう。エーザイ工場の道端で目についた。

(15) クララ(マメ科)

堤防等に生える多年草で、ふるさと史料館前の道路下斜面でよく見かける。葉だけの時は複葉の姿が帰化植物のイタチハギの幼時に似て

り間違えることがある。根の汁をなめるとあまりにも苦く眼がくらくらというのでクララと名付けられた。初夏に淡黄色の花を着ける。おしべはマメ科のほとんどは軸の部分が合して筒状になるのに、これでは1本ずつが離れたままである。果実は種子の間がじゅず状にくびれる。



ク ラ ラ

(16) ナンテンハギ(マメ科)

春の芽芽をアズキナと呼び山菜の代表的なものである。あくもないのでゆでる味は清白で好まれる。葉がナンテンに似るのでこの名があり、また小葉が2枚ずつ並ぶのでフタバハギともいう。北山町の木曾川左岸で僅かだが、9月に開花を見た。

(17) ツルマメ(マメ科)

原野にふつうなつる性の1年生で、葉は細く他のものに巻きつき下向き毛がある。葉は3小葉からなり小葉は細長い。花は淡紅紫色で8〜9月に咲く。果実はやや扁平で淡緑色の毛を密生シダイズのさやを小さくしたようである。栽培されるダイズの種類といわれ、古代に大陸から帰化したものかもしれない。南派川の川原等で見られた。

(18) ヒメグサ(マメ科)

別名ノアズキとも呼び、山野でよく見られるつるの多年草。葉は3小葉からなり、小葉はツルマメより短かく、裏面には赤褐色の腺点が

多数ある。花は黄色で形は変って他のマメ科のように左右相称になっていない。正面から見ると左右が不同で花弁が左側に片寄って着く。豆果は長さ4cm位で中に6〜7個の種子がある。11月にユーザイ工園のフェンスにはヒメクズのつるが巻きつき、種子が出たあとのみやがらせん状に巻いていた。

(19) キンミズヒキ (バラ科)

道端や草原に多い多年草で、護国の雑木林下等で見える。からだ全体に毛があるが株によって粗密がある。葉は互生し奇数羽状複葉で小葉は大小不揃いになり、基部には大きな托葉がある。この葉の特徴から花期でなくてもキンミズヒキということがわかる。夏秋の頃黄色の細い花が穂状に咲く。花のながく片は5枚あり、その外側に副がくが多数あつかき状になり、果実になった時このかきで動物の体や人の衣服に付着して散布される。

(20) オヘビチゴ (バラ科)

あぜ道等に多いが木曾川川原には各所に分布する。川島町の川原にも多く、鮮やかな黄色の花は野生植物としては美しく目立つ。果は傘状で5小葉からなるが先の方の葉は3小葉となる。葉は地上をはい伏毛を生ずる。よく毒イチゴといわれる(南でないが)ヘビチゴとは分類上別属で果実が違いヘビチゴのように目



オヘビチゴ

立たない。東南アジアに起源をもつ史前帰化植物の一種で、人里植物として身近にあるもの1つである。

(21) カワラサイコ (バラ科)

川原に多くあってこれの根が薬用にするミシマサイコ(セリ科)の根と似ているのでこの名がついた。木曾川川原には各所にあり、特に松倉町では群生を見る。葉は羽状複葉で裏面には白色の綿毛が密生する。小葉は15〜20個あり小葉間にさらに小裂片がある。1小葉は中助近くまで深裂するのでシダの葉のようになる。花には黄色の5花弁があり、内外2列のながく片をもつ。



カワラサイコ

(22) イナズナ (アブラナ科)

植物の名前は役に立たないものの場合イヌと名付けることがある。例えばサンショウに対してイヌサンショウ、ワラビに対してイヌワラビ等で春の七草のナズナに対し食用にしないのでイヌナズナという。ナズナとは風が異なり、果実が側方から扁平のナズナに対してイヌナズナは背腹から扁平である。葉はナズナのように切れこみはなく鋸歯があるだけの楕円形である。春に黄色の花を着け果実は平たい長楕円形で短毛を密生する。ユーザイ工園南の南條川川原で少数自生するのを見た。

(23) タケニグサ (ケシ科)

丘陵地から人家附近の荒地に生える大型の多年草で葉は1〜2mに達する。葉は中空で切ると黄色の乳液を出す。竹を煮る時にこの草を入れると柔らかくなるので竹煮草と覚えたと、実際には竹は柔らかくならないとのこと。竹の専門家室井綿氏は冬枯れた時、葉に色ついた果実が多く残っている姿が枯れたネザサを思わせるので竹似草だという。葉は大きく広卵形で掌状に中裂し裏面は白く細毛がある。6〜8月頃葉頂に多くの花を着ける。花といっても花弁はなく、ながく片、おしべ、めしべだけがある。松倉町の木曾川左岸や松倉神明社境内(小島のお宮)で見た。



センニンソウ

(24) センニンソウ (キンポウゲ科)

木曾川川原では時々このつる草が他の草木の上をはい廻り、白いよく目立つ花を一杯着けているのに出合う。松倉町の川原等で自生を見た。葉は3〜7個の小葉からなる奇数羽状複葉でつる状の茎に対生する。各小葉は楕円形で鋸歯はない。夏秋の頃集散花序が出て多くの花を着ける。真の花弁はなく4個の白い花弁状のものはながく片である。キンポウゲ科の特徴通りおしべもめしべも1つの花の中にそれぞれ多数である。晩秋果実が熟すが果実はまるで種子のようである。花の時のめしべ上部が伸びて羽状毛が生え果実の散布に役立っている。有毒植物で仙人掌と書くが意味は不明である。

(25) アキカラマツ (キンポウゲ科)

カラマツツ属は日本に10種以上あり和名はおしべの形がカラマツの葉を思わせるからという。この属の中で本種は最もふつうに見られるもので木曾川川原には多い。葉は2〜8回分かれた複葉で、小葉は円〜楕円形で先は浅く3〜5裂する。夏から秋にかけて円錐状の花穂を出し淡黄白色の小花を多数着ける。果実は2〜4個ずつ集まり柄はない。松倉町の堤防斜面等で見えた。



アキカラマツ



カララナデシコ

(26) カララナデシコ (ナデシコ科)

秋の七草の1つとして古くから親しまれた野草であり、松倉町の川原で見える。葉は線形で対生し基部で左右のものが連合して節をとり巻き淡紅色か白色で、ながく長い筒形である。同属

のセキチクやカーネーションのように花ばかり派手になったものより、花は地味だが莖葉花と調和のとれた大ききの野草カワラナデシコのほうが私は好きである。特にセロファンに包んだカーネーション等は造花に見えてしまう。なお単にナデシコといった場合は本種をさす。

#### (27) フシク科(ナデシコ科)

茎の節の部分が暗紫色を帯びるのでこの名がある。木曾川川原には点々と自生し、特に笠田町の草地に多い。葉は長楕円形で両端は尖り、対生する。6～9月頃ナデシコ科の中では小さく自立しない花を着ける。花は1～3本の柄によって茎の基部に数個ずつ着き、白色の花弁は小さく先は2裂する。果実はよく自立し熟すと先が6裂し、茶褐色の細かい種子を出す。

#### (28) ヤナギタデ(タデ科)

川原や水田にあり、葉がヤナギの葉に似るのでこの名がつく。香辛料にするタデはみな本種から出たもので、これも葉をかむと辛い。植物を見分けるのに眼だけでなく、鼻やこの場合は



ヤナギタデ

舌を使うわけで、他のタデは辛いので花がない時にはよく分かる。秋咲きの1年草だが時に越年生して2年生した多年生になることもある。花には多くの腺点がある。木曾川川原には各所に群落をつくり、川島町内にも多い。5月に河田橋附近で多くの芽生えを見つけ、かんでみて

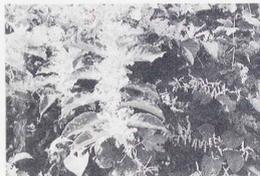
ヤナギタデとわかった。これの栽培したものばかりのつみに使われる。

#### (29) ミズヒキ(タデ科)

叢陰や林下に生える多年草で、渡町のモウツウチク林や河田町の八幡神社等で見える。地味な花だが昔から文人に愛されて茶花にもなり庭に植えられることもある。葉は楕円形で表面に黒い斑紋のあることが多い。花のがくは上半部が赤く下半部が白いで、紅白のミズヒキ(水引)にたとえる。果実には2本の花柱が残っており花の外につき出す。果実の柄には関節があって触るとそこで切れて果実が飛ぶ。花柱の先がかき状に曲っているので動物体等にひっかかって運ばれる。

#### (30) イタドリ(タデ科)

いたる所に繁茂する大型の草で、若芽はタケノコに似る。貧しかった昔の子供はおやつがわりに餓っばい味ながら若芽を食べた。地方によ



イタドリ

っては煮て食用にする習慣もある。茎は成長すると1.5mに達する。葉は卵形で基部は直線に切った形が成い心形となる。雌雄異株で7～10月に白色の小花を多く着ける。花の赤いものもあり特にメイゲツツと呼ぶ。川島町の川原でも白色のものに混って赤色のものもあり群生していて美しい。雌株には8穂ある果実を着ける。痛み取りの薬効があるからイタドリというのがたはたして本当かどうかわからない。

#### (31) カナビキソウ(ビャクダン科)

木曾川川原に点々と見られる半寄生植物である。半寄生とは笠松總馬場にあるヤドリギのように葉緑素を持っていて光合成をしながら、他の植物に寄生して養分を吸い取るものをいう。ビャクダン科には半寄生のものがあがり岐阜県山間部にあり縁起物で料理のかざりに使うツクバネもその例である。カナビキソウは小棚橋下ではカワラヨモギやカラワサイコに、松倉町の川原ではヨモギに半寄生していた。葉は互生し線形で細く先は尖り緑白色である。5月頃あまり自立しない小花を着ける。カナビキソウの意味は不明という。



カナビキソウ

#### (32) カナムグラ(クワ科)

長野県等へ行くとビールに苦味をつけるホップが栽培されているを見る。エーザイの薬用植物園にも植えられている。ホップの日本自生種であるカラハナソウと同属のカナムグラは道端や荒地地も多い。茎はつる状で下向き刺が多く触れると痛く嫌な雑草である。葉はクワに似てつるのひら状で5～7裂し、ざらざらする。雌雄異株で雌株にはホップの実に似た果実を着ける。川島町内の川原等各所に見られる。

#### (33) クワクサ(クワ科)

クワの葉に似た1年草で荒地に多い。北山町の木曾川川原で見える。クワ科は樹木が多いが草

本は少なく、カナムグラやクワサはその少ない例である。葉には表裏とも毛があつてざらざらする。雌雄同株で雌花と雄花は混生する。花弁は5枚の花で、めしべの形が特異で、子房の横腹のところからめしべの軸が出ている。子房地の上半部は種子とともに果実となり、下半部は水液を含み白色多肉になり、圧力で果実をはじき飛ばす。

### 10. 在来の子葉草本

単子葉植物のうち睡花植物と水生植物を除いた草本をここにとりあげる。単子葉とは最初に出て来る子葉が1枚ということで、一般に葉が細く葉脈が平行のものである。ラン科、ユリ科、カヤツリグサ科、イネ科等がその主なものである。花の構造は各部は3の数が基本になっており、外側から順に8枚、花弁3枚、おしべ外8本と内8本、めしべは8本が合して1本となる。ユリ科はこの典型的な花をもっているが、その他のものは進化して各部の数が減少する方向に変化している。生物の進化というと一般には小さいものから大きなものへ、簡単なものから複雑なものへ愛っていく。しかし時には逆の場合もあり、ユリ科のような花がもとになって、各部が少なくなつて他の単子葉類が進化して生じたと考えられる。例えばカヤツリグサ科はユリ科の3数性を保っているが、イネ科はさらに減つて2数性となる。最も普通のカヤツリグサ科のカヤツリグサを例にとれば、1つのは楕円形の鱗片(苞葉)に包まれ、がくと花弁はなく、おしべ2本とめしべ1本がある。おしべは外側1本と内側の8本全部が退化している。イネ科では花序が短縮して小穂となり、第1苞類と第2苞類に包まれる。この苞類を除くと中に1つまたはいくつかの花があるが、1つのは花は萼類と内輪に包まれ、その中に6本または8本

のおしべと1本のめしべがある。めしべの子房のもとに小さな鱗被が2個あるが、この2個がくくと花弁の変化したもので、これがふれることにより萼類と内穎が開き花が咲く。

#### (1) モズリク(ラン科)

ラン科といえば貴重植物で産物のものばかりだが、これだけは例外で各所に見られる。各務原市鶴岡の国道端で自動車の排ガスのかかる所にもあって驚いた。笠田町の草地や町西端大日との塚の川原で花を見る。茎は高さ10~30cmで径5mm位の淡紅色の花が多数らせん状に着く。花序がねじれているので、別名をネジバナともいう。

#### (2) ヒガンバナ(ヒガンバナ科)

史前帰化植物の一種で、大里に多く山地にはない。例えば井波一雄氏の車中観察によれば、長良川でいでは郡上八幡まで、中央線まで田立川南木曾まで、高山線いでは飛騨小坂まで見られるという。川島町内の川原、墓地、空



シオバナヒガンバナ(栽培品)

地等で秋の彼岸前後に真赤な花を見る。別名マジュシヤゲと呼び、「赤い花なら曼珠沙華オランダ産地に雨が降る。……」の唄でも有名である。前川文夫氏によると中国揚子江沿岸に自生らしいものがあり、よく種子をつくるという。日本に渡来したものは8倍体(染色体数が普通

のもの1.5倍)で種子が出さない。地下の鱗茎で増殖し、葉は晩秋に出て越冬し夏に枯れる。つまり他の多くの多年草がいわば冬眠するのとは種は夏眠をする。鱗茎は有毒だが昔は流水で抜抜きして飢饉時の救済食品にした。墓地で彼岸に合わせたように開花するので、死人花等の方言で呼ばれ不気味なイメージがあり長い間園芸的に受け入れられなかった。しかし白花のシオバナヒガンバナ等が種に植えられている。

#### (3) シオナデ(ユリ科)

山野に生える多年生をつる植物で、他の草木にからみ着いている。同属のサルトリイバラと違ってつるに刺はない。山菜として有名なもので新芽の形がアスパラガスに似るので、山のアスパラガスともいわれる。葉は楕円形で数本の縦脈があり托葉は巻きひげになる。雌雄異株で7~8月葉の基部から長柄を出しその先に淡黄緑色の小さい花を多数着ける。松倉町の河跡湖周辺では、開発の為に段々少なくなっているが容易に食べられなくなった。

#### (4) サルトリイバラ(ユリ科)

山野に多い木質のつる植物だから樹木の項に入れるべきだが、普通の園芸等では草本に入れている。シオナデと違って葉に刺があって山の嶺がひっかかるということでサルトリイバラというが、バラ科ではない。葉は円形から楕円形で、山岳地方で餅や団子を包むのに用いられる。初夏の新葉の伸びる頃、葉の基部から短い柄が出て先に多くの淡黄緑色の花を開く。雌雄異株で、雌株には秋になって赤い果実が出る。河田町や渡町の雑木林で、つるが他の植物によじのぼっているを見た。

#### (5) ヤブラン(ユリ科)

ランと名前がつくがラン科ではない。山林内に生える多年草で、根は多数あり時に一部はふ

くれる。葉はすべて根生し線形である。夏に花茎が出て多くの淡紫色の花が数個ずつ塊まって着き全体は穂状になる。花は小さいが典型的なユリ科の花である。花後の種子は光沢があって黒く果実の縁に見える。被子植物だから子房(成長して果実)の中に胚珠(成長して種子)が出るが、この仲間では子房の壁がすぐ覆れて胚珠が飛び出してしまふ。その為果実がなくて種子だけが存在するのである。胚珠の成長ぶりは不揃いで育ちのよいものが成長して種子になる。川島町内の林内や竹藪でよく見かけた。

#### (6) ホウチャクソウ(ユリ科)

竹藪や雑木林の中に生育する多年草で、松原町の林内で小群落を見た。葉はササの葉に似て、茎は直立して上方で分枝する。この2または今分かれることにより、アマドコロやナルコユリと区別出来る。5月頃枝の先に1~8個の白花が垂れて咲く。花の外形もアマドコロに似ているが、花被片が合生して先だけ6裂するアマドコロと違って、ホウチャクソウは6枚がそれぞれ垂れて咲く。花の穂は先の方に雌花、基部の様子を寺院や五重塔の軒につるす鈴の鈴のホウチャクに見たててこの名がついた。地下に横に伸びる根茎があるので、周囲へ伸びて広い面積を占めることになる。

#### (7) ヤブミョウガ(ツクサ科)

夏に濃尾平野の神社等へ行く时必须といってよい程、本種の白花が見られ、渡町の葎藪や雁場橋の南側の樹陰で見た。花序は葉の頂きに出る5~6段に分かれて花が着く。同じ株に雌雄の花があり、雌花ではめしべがおしべより長く雄花ではめしべが退化して小さくなる。果実は球形で青黒く熟す。花のない時はミョウガ(シウワガ科)と間違えやすいが、ミョウガは良い香りがし葉の表面がざらつけない。ヤブミョウガは無臭で、ざらざらするから見分けられる。

#### (8) ヤガミスゲ(カヤツリグサ科)

スゲ属はカヤツリグサ科のうちの最大の属で日本産だけで約250種もあり、木曽川川原で今までに約20種を記録した。スゲは開花期以外の葉だけでは種を見分けることが出来ないが、ヤガミスゲだけは例外で、木曽川川原の水辺に迎えることから、いつでも本種とわかる。木曽川の水辺には必ずといってよい程生育し、所によっては群生する。町内では雁場橋附近や川原の水につく所に多い。6月頃穂状の花序を着ける。ヤガミの意味は牧野園蔵ではどこかの地名ではないかという。

#### (9) アゼナルコスゲ(カヤツリグサ科)

スゲは昔昔や笠やさげみの材料にされたが、今はその用途もなく毛も地味なので人目につかない多年草である。ナキリスゲ等一部のものは秋咲きだが、大部分は春咲きで5月頃各地を歩き各種のスゲが観察出来る。川島町内では約10種自生すると思われる。そのうちアゼナルコスゲは、あせ道等で見かける種であり、花の穂の穂でチゴユリ顔に入れている。花の穂は基部に雌花を着ける。花の鱗片は幅広く先が急に尖るという特徴のある形となる。渡町西の運動場等で見かけた。

#### (10) ナキリスゲ(カヤツリグサ科)

スゲは秋咲きものは少なく9~11月に花を見ればまず本種で、各地に見られる。ナキリスゲとは葉が硬いので軟い葉が切れるという意味らしい。花序は円錐状で5~10の穂を着ける。一般のスゲは上部の穂が雄性、下部の穂が雌性だが、ナキリスゲでは各地の上部が雄、下部が雌となる。河田町の竹林の縁などで見た。

#### (11) シラスゲ(カヤツリグサ科)

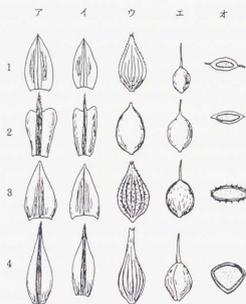
潮り気のある林の中等に生えるスゲで、葉の裏が白立って白いのでシラスゲという。葉の幅は他のものに比べて広く5~10mmあり3本の葉

脈が太くよく見える。スゲの雄花は簡単なもので1枚の鱗片とおしべが8本あるだけで、雌花には1枚の鱗片とつぼ型の果穂の中に1本のめしべが入っている。両者ともがくも花弁もない。果穂の形は種によって異なり、シラスゲでは果穂の上部（柄）が長く先が浅く2裂する。5月の調査で南深川の川原で見かけた。

(12) ハタガヤ (カヤツリグサ科)

川原や砂地に生える小さな1年草で、葉は糸のように細く1株から多数の葉と茎を叢生する。茎は高さ10~18cm、頂きに2~3の細い苞葉と柄のない多くの小穂が塊って着く。小穂は淡褐色で鱗片は卵状の角形を先は尖る。私の住む稲沢市の砂地の墓地にこれが群生するが、その周辺の畑や道端には全く見られない。川島町内では小網町の空地で見たが、町全域が砂地だからどこにもあってよきそうだが、各所には見られない。

スゲの花



1. ヤガミスゲ 2. アゼナルコスゲ 3. ナキリスゲ  
4. シラスゲ ア 雄花の鱗片 イ 雌花の鱗片 ウ 果穂  
エ 果実 オ 果穂横断面

カヤツリグサ科とイネ科の比較

	カヤツリグサ科	イネ科	備	考
基本数	8	2	体の各部の器官の数が8と2	
葉断面	3角形	円形	カヤツリグサ科には円形、4角形のものもある	
葉の列	3列	2列	上から見て3列と左右2列	
葉舌	ほとんどなし	あり	葉舌と葉鞘の境の膜状物	
花被	糸状のもの3~6本かなし	鱗被2個	がくと花弁に相当する	
エイ花の類	鱗片(穎) スゲ属では 鱗片(護穎 に相当) 果穂(内穎 に相当)	第1穂穎 第2穂穎 護穎 内穎	苞葉の変化したもの	
人間生活との関係	有用植物少ない	有用植物多い	すげがさ、すげみのに対し穀物として食用になるものが多い	
帰化植物の数	少ない	多い	北隆館: 日本帰化植物図鑑では 0: 81 保育社: 原色日本帰化植物図鑑では 2: 28	



ハタガヤ

(13) アオガヤツリ (カヤツリグサ科)

本曾川の水辺には各地に見られる1年草で、葉はむらがるて出て高さ10~80cm、基部に少数の葉がある。コゴメガヤツリ等最も普通のものの穂が茶褐色をしているのに対し、これは緑色をしているのでアオガヤツリという。水生植物に入れたサンカイイヤカンガレイの近くの少し陸側には本種の姿を見える。小穂は扁平で柱頭は2稀に8個、花期は8~10月だが、12月の調査でも川島大橋西で見た。



アオガヤツリ

(14) ススキ・オギ (イネ科)

大型のイネ科で秋のお月見には欠かせない草である。両者の穂が一見似ているので間違われやすいが、別種で慣れれば離れた所からでも区別出来る。オギはススキのように東になって生え、穂の出る頃は葉の下方の葉は枯れている。

水に対する好みも違い、川原の水辺に近い所にオギ、堤防斜面より上にススキがあり、はつきりしたすみわけが見られる。オギの穂は小穂基部に銀白色の長毛があるので、短毛のあるススキよりふさふさして銀色に見える。またススキにはのびがあるので、のびないオギとすぐ見分けられる。ススキは秋の七草の一つで、川島町内各所にオギとともに多い。

(15) ウシノシッペイ (イネ科)

牛の尻尾とか牛をたたくむらの意味といわれる。どこに花穂があるか一見して見つけにくい程で、茎と花穂が1本の細いむちのようである。7~9月に開花するが本曾川でも河口に近い所に群生するアイアシに似てそれより細い花穂を出す。小穂は各節に2個ずつ生じ1個は無穂1個は有穂で柄は主軸と上方までほとんど着する。本曾川川原には所々にあり、特にふるさと史料館前には多く見られた。

(16) オガルカヤ (イネ科)

イネ科はカヤツリグサ科と逆で帰化植物が多く有用なものが多い。ところがオガルカヤは純然たる在来のもので無用の草本である。最近濃尾平野ではあまり見なくなってきたが、笠田町の草地と渡町の堤防斜面で小群落を見た。別個だが名前似たものにメガルカヤがあるが、外見はメガルカヤのほうが穂が大きく、がっしり



オガルカヤ

しており、オガルカヤのほうが小さくて、しなやかである。オガルカヤの葉は硬くて葉とともに香気があり同属のウスイガヤは印度・マレー原産の香料植物である。  
(17) イヌビエ(イネ科)

水田や休耕地には水田1年草で史前帰化植物である。川島町には水田がなくなれば少ないが、小朝町の道端の湿った所に見られた。葉の長さは0.6~1mでイネの穂が出た頃抜き取ったイヌビエがよくあざ道に捨ててある。水田の中ではイネそっくりに駆除してしまわれこみ除草剤にも強いしたたかな雑草である。変異性に富み例えばのぎがないもの、ごく短いもの、長いもの等あり長いものは変種としてケイヌビエという。昔食用に栽培されていたヒエも変種の1つであ

イヌビエとイネの葉の比較



イヌビエ  
葉舌なし



イネ  
葉舌あり

木曾川川原の大型イネ科草本

種名	属名	葉		花		生育環境	分布 (○は川島町内に自生)
		長さ(cm)	幅(cm)	花穂	小穂		
ダンチク	ダンチク属	50~70	2~5	円錐状	小穂3-5	のぎと毛あり	やや乾燥地 河口~下流域
ツルヨシ	ヨシ属	20~30	1.5~2	円錐状	小穂3-4	長毛あり	水湿地 ○上・中流域に多い
ヨシ	ヨシ属	20~30	2~4	円錐状	小穂2-4	長毛あり	水湿地 ○河口~上・中流域
セイヨコシ	ヨシ属	40~70	2.5~4	円錐状	小穂2-4	長毛あり	やや乾燥地 全域だが数は少ない
マコモ	マコモ属	50~100	2~3	円錐状	1小穂	露花だけのぎあり	水 ○全 域
アイアレ	アイアレ属	20~40	1~3	散房状	1小穂	なし	水湿地 河口~下流域
オギ	ススキ属	50~80	1~3	散房状	1小穂	長毛あり	やや湿った地 ○全 域
ススキ	ススキ属	50~80	0.7~2	散房状	1小穂	のぎと毛あり	乾燥地 ○全 域
サトウキビ	サトウキビ属	30~60	0.4~0.6	直立穂状	1小穂	長毛あり	乾燥地 河口~下流域
セイパンモロコシ	モロコシ属	20~60	1~2	円錐状	1小穂	無毛、小穂にのぎと毛あり	乾燥地 ○全域に帰化

り、先年購入して食べてみたが大変まずかった。イヌビエの和名は食用にならないヒエの意味である。イネには葉身と葉鞘の間に葉舌があるが、イヌビエにはないで穂が出る前の時期の除草の見分けに使うよい。

(18) チカラシバ(イネ科)

川島町内の川原や道端のどこにでも見られるもので、穂は試験管洗いや煙突掃除のブラシを

晩秋野外で衣服に著く果実(川島町)

種名	科名	附着するしくみ
アレチヌスビトハギ	マメ科	かぎ状に曲った毛
ヌスビトハギ	マメ科	かぎ状に曲った毛
ヒサタイノコズガ	ヒユ科	刺状の小苞葉
ヒカゲノコズガ	ヒユ科	刺状の小苞葉
オオオナモミ	キタ科	くちばし状突起と刺
イガオナモミ	キタ科	くちばし状突起と刺
コセンダングサ	キタ科	下向きの剛毛のある刺
コバセンダングサ	キタ科	下向きの剛毛のある刺
アメリカセンダングサ	キタ科	下向きの剛毛のある刺
キンミズヒキ	バラ科	剛がのかぎ状の刺
ミズヒキ	バラ科	かぎ状に曲った毛の先
チカラシバ	イネ科	黒紫色の剛毛
チヂミザサ	イネ科	のぎから出る粘液

思わせる。和名は力芝の意味で根がしっかり土中に着いていて、力強く引っぱっても簡単に抜けないからである。葉は高さ60~70cmで、秋に開花し小穂は両性花1個と果実の出ない不稔花1個からなる。晩秋草むらを歩くとも果実が衣類について閉口する。これは花穂の剛毛が繊維にさきって種子が散布されるのである。

(19) クサヨシ(イネ科)

水辺に群生する多年草で高さは60~150cm。葉は長さ20~30cmで白っぽくややざらつく。開花は5~6月で穂は直立し、はじめは円柱状に見えるのが花の盛りになると枝が横に出て、全体の形がやや円錐状になる。小穂は長さ4mmで、中に1個の果実になる小花と退化した小さな2個の小花がある。1880年進化論で有名なダーウィンはクサヨシの芽生えを使って、光の方向へ曲がる現象(屈光性)の研究をした。これがきっかけとなってその後植物の成長ホルモンであるオーキシンが発見された。5月29日渡野の南浜川で花を観察した。

(20) ネズミノコ(イネ科)

和名はその穂が細長くネズミの尾に似るからだが、名前も姿もあわれな雑草である。英名も Smut grass (汚れた草) で間違っても人の見目は同じである。イネ科は一般に見ずらいものが多いから、本種もせめて名前ぐらいはもう少しましなものにしたところ、この草を見る度に思う。多年草で当りのよい原野に叢生して株をつくる。晩秋の頃直立する花穂を出し、穂の枝は短く小穂には1花がありがたきほまたない。各地の空地や道端に見られ、町内では笠田町北の運動場周辺で見た。いくら運動に来た人に踏まれても平気で、真夏の炎天下でもたくましく生きている。

(21) ヒエガエリ(イネ科)

当りのよい湿った所に生える2年草。和名

はヒエが変って生じたものの意味で、ヒエとは外見が多少似ているようだが、細かい点は全く異なり様はうすい。葉は白っぽくてややざらつき、葉舌は長い。初夏葉頂に円柱状で紫緑色の花穂を出す。小穂には1花があり2個の苞穎は同長で、それぞれは中脈を中心に2つ折れとなり先端は2裂してその間から長いのぎが出る。

藪類にも短いのぎがあり、属名 Polygona は穂全体にのぎがけずたに多く見えるという意味の語である。松倉町の川原等で見かけた。

(22) ヤマアワ(イネ科)

笠田町の空地等で見たが、林縁や草地にある多年草で葉は長さ1m位ある。イネ科は形が皆より優いて見分けにくいだが、小穂がただ1つ的小花より大型のものもそう多くない。さらに2個の苞穎を除いて小小花の基部に白い毛があれば、ノガリヤス属で属間では容易にわかる。ところが日本には属の中に20種もあって種を決めるのはむずかしい。しかし平地にあるものはヤマアワ、ホッスガヤ、ノガリヤスのどれかがほとんどだから比較的わかりやすい。

(23) ノガリヤス(イネ科)

山野によくある多年草で、小朝町の雑木林下で見る。葉は高さ1m内外で基部から叢生し、秋に長さ20cm位の穂を出す。穂は多く分枝し小穂を多数着ける。小穂の形はヤマアワと似て、1小花より2個の苞穎の間から藪類ののぎが長くつき出る。小花の基部の毛はヤマアワより短い。和名は野原のカリヤスの意味だが、カリヤス(ススキ属)は全く別のものである。

(24) オヒシバ(イネ科)

雄ひ芝の意味で穂が細い雌ひ芝に対しいたのでこの名がついた。川島町内の道端や川原等に普通の1年草で、根は土中にはびこり放きにくい。夏葉頂に傘形をした花穂を着け、枝軸は5~8cmでその節間に小穂が2列に密に着く。こ

れの変種が雑穀のシコクビエで粒が大きく食用になる。戦前まで日本各地の山村で栽培されていたが今はほとんど見られない作物である。白山麓の石川奥白峰村は今も毎かつくられている。穂がカモの足に似ているので、カモアシが縮まってカマシの方言で呼ぶ。1988年同村の白山自然保護センターを訪れ栽培状況を知った。

#### 食糧作物に近縁の雑草（川島町に生自）

科名	食糧作物	雑 草	類縁関係
イネ科	ハトムギ	ジュズダマ	同種異変種
〃	モロコシ	セイウモロコシ	同属異種
〃	キビ	ビスカキビ	同属異種
〃	ヒエ	エイヌビエ	同種異変種
〃	アワ	エノコログサ	同属異種
〃	シコクビエ	オヒシバ	同種異変種
〃	オートムギ	カラスムギ	同属異種
マメ科	ダイズ	ツルマメ	同属異種

## 11. シダ植物

山菜のワラビ、ゼンマイ、クサソツツ（コゴミと俗称）等がシダ植物で、スギナとツクシ（栄養葉と胞子葉）、樹幹等に着くノキシノブ、正月の葉の飾りに使うウラボシ等種類が多い。以上の例は割と乾燥した所に生えるが一般的にシダは湿った地が多い。従って伊吹嶺が吹きすさぶ川島町附近は冬寒乾燥するから、シダの生育には不適な所である。岐阜県では美濃山間部の美山町附近、愛知県では三河山間部の豊川谷等は背後に山があって北西風がさえぎられる為多くのシダがある。川島町で見えたものは僅か、どこにもある普通種ばかりである。

シダは花が咲かないで葉の裏に胞子のうというふろろが着き、中に胞子が出き。これが飛び散ってその中で運のいいものが廻った所で発芽して前葉体という小さなハート型のものにな

る。前葉体には卵と精子が出き雨の日等に受精が行われ発育してシダの本体になる。素焼の植木鉢の表面や山地の日光の当たらない崖等や前葉体やそれらから出た幼いシダを見る。多年生の株から出るシダの若い葉はちょうどバイオリンの柄の先のように内側に巻いて出る。やがて葉が成長すると、それぞれの種により一定の形の胞子のう群が出き、分類上重要な特徴となる。従って胞子のう群が着いていない若い葉では名前を測るのは無理である。

#### (1) ワラビ(イノトソク科)

新葉を食用にし根茎から採ったでんぷんでワラビ餅をつくる。もっとも現在では本物のワラビでんぷんを探るのは大変で、中味は栽培のジャガイモやサツマイモのでんぷんであろう。根茎は太くその中には水や養分の通路である維管束が外側内側と2重に環状に並ぶ。その為断面はちょうど「おたよ船」の切口を思わせる。全国的に広く分布し山野の陽地にごく普通に群生し、所によっては畑に栽培される。川島町では堤防の斜面にイタドリ、ヨモギ、アキカラマツ、クララ等と混生している。

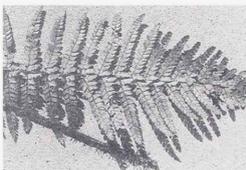
#### (2) イノトソク(イノトソク科)

井戸の附近に生える草の意味で、人家の石垣等に生える常緑性のシダである。胞子葉は一般の葉と異なり羽片が細くて長く、副葉は広く葉縁に胞子のう群を着ける。一般の葉は幅は広く短かく羽片間に翼があり葉縁には不規則な鋸歯がある。川島町内では竹藪の北側や神社社殿の石垣等によく見られた。

#### (3) アイアスカイノデ(オシダ科)

イノデは猪の手の意味で、密に鱗片でおおわれた若葉がイノシシの手に似ているからという。イノデには多くの種や変種があり、この地方には、イノデとアイアスカイノデが多い。アイアスカイノデはイノデの変種で、葉柄下部の

鱗片の形が違ふ。アイアスカイノデのほうが鱗片が細く縁にイノデのような毛状突起がない。シダは葉柄下部の鱗片が分類する時役立つので、根元から葉を探らないと確実な名前がわからない。渡戸や松原町の竹藪の中で見えた。



アイアスカイノデ

#### (4) フユノハナワラビ(ハナワラビ科)

冬に新葉を生じその上に見花のような胞子葉を別に生ずるので、フユノハナワラビという。夏は地上部は枯れてしまい、9月～翌年3月頃まで葉がある。普通のシダは葉の裏に胞子のうを着けるが、この類は栄養葉と胞子葉を別にする。また胞子のうの壁は普通のシダは1層の細胞層からなるが、この仲間には壁が厚く数層の細胞層から出ている。松原町の三ツ屋池附近等で見えた。

#### (5) オオハナワラビ(ハナワラビ科)

フユノハナワラビに似ているが、葉の翼片にあらひ鋸歯があること、胞子の膜にこぶ状の突起があること等で区別出来る。フユノハナワラビと同様夏は地上部は枯れるが、9月頃新葉を出し、同時に胞子葉も出して栄養葉より長くたく強く反対した。政府は神道の国家管理による民衆の支配をかり、1町村1社を目標に神社の合併をはかった。町村数は当時約1万2千であったからおよそ16分の1に減らす計画である。彼は神を敬う気持ちと同時に自然科学者として立派な神社林を合併の為に破壊されることにたえ

生活力強くコンクリート農耕地の僅かの隙間にも生えている。觀賞用に植えたり細工物を磨くにはトクサに似ているが、食物ではないというので、イヌトクサという。スギナと違って栄養葉と胞子葉の区別がなく、地上部の先端に胞子のうの塊を着ける。トクサと違って茎の基部や中央部から不規則に枝を出す。



イヌトクサ

## 12. 自然保護

#### (1) 神社林の保護

開発しつくされた濃尾平野では、この地方の本来の植生である照葉樹林は神社にしか残っていない。昔から日本人は鎮守の森と呼んで、神社だけは樹を伐らざるおそやかな雰囲気を保ってきた。この貴重な神社林を訪れて思うのは、非凡な頭脳を持ち一風変わった野人学者南方熊雄のことである。現在も彼の日記や業績に関する書物が続々出版され注目されている。和歌山県出身の偉大な生物学者、民俗学者であり、明治30年に時の政府により出された神社合祀令に強く反対した。政府は神道の国家管理による民衆の支配をかり、1町村1社を目標に神社の合併をはかった。町村数は当時約1万2千であったからおよそ16分の1に減らす計画である。彼は神を敬う気持ちと同時に自然科学者として立派な神社林を合併の為に破壊されることにたえ

られなかったのである。彼は熱血漢であり反対運動中、警官と衝突して一時入獄までさせられたが主張をまげず頑張り遂に合併を阻止させた。それでもこの時神社が約8万継って、現在では全国に11万余あるとのことで貴重な存在である。われわれは南氏方に大いに感謝しなければならぬ。先祖が必死になって守り続けて来たものを今簡単に失ってしまっはけない。戦後台風の影響や住民の無理解による伐採等で減少しつつある。時代の流れとはいえ、鉄筋コンクリートの社殿があるだけで樹木もなく子供遊園地の被害や住民の無理解による伐採等で減少しつつある。時代の流れとはいえ、鉄筋コンクリートの社殿があるだけで樹木もなく子供遊園地の被害や住民の無理解による伐採等で減少しつつある。時代の流れとはいえ、鉄筋コンクリートの社殿があるだけで樹木もなく子供遊園地の被害や住民の無理解による伐採等で減少しつつある。時代の流れとはいえ、鉄筋コンクリートの社殿があるだけで樹木もなく子供遊園地の被害や住民の無理解による伐採等で減少しつつある。



渡橋から見たヤナギ群落

ば何でもよいわけではない。造園業者に頼めばすぐ外來の庭園木を植える。日本古來の照葉樹林内に外国の樹木は同じ樹でも合わない。遊園地や公園とは区別すべきである。経済性を考えてスギやヒノキの植林に変えることも止めて頂きたい。もし植えるならば照葉樹林内の自生樹にし、幼樹や下草を保護する為林内にしないよう柵を設けることも必要であろう。境内の清

掃をあまり行い過ぎて幼樹や下草まで抜いてしまわないよう、また落葉樹の項で述べたマント群落やソデ群落を無暗に除かないように要望する。

## (2) ヤナギ科の保護

明治以前の治水の方法は土木工事の能力が劣っていたので、洪水に対して川をなだめるような柔軟な対策であった。流域の森林を育成し遊水地を大きくして水を貯め、下流には分水路をつくって洪水を分散した。ところが明治になって治水の先進国であるオランダの技術が入り、近代工法による堅固な堤防をつくるというより積極的な方法に変わった。自然の趣と顔は覆されて、平瀬ばかりになり、蛇行していた川が直線化された。動植物のよい住みかであったわんどは、つぶされて単調な川原になった。川島地区の三浜川もその1例である。その根本は多量の水を早く海に流してしまうことである。その際水流の邪魔になるヤナギは除かれてしまい、木曾川でも弥富町から川口まではまるで運河の様である。ヤナギは根をはって土地を固定する働きがあり、木曾川でも櫛枝工と称し背割堤で堤防補強に使っている。それを流水を妨げこみが引かかって汚いというので伐採され再び萌芽しないように薬品までかけられてい



コゴメヤナギの巨木

る。中州に生育するものは伐られても止むを得ないが、本流ぞいにあるものは、素人判断で無責任だが洪水時の妨げはそんなに大きいだろうか。渡町と一宮市大日との境の広大なヤナギ林や、松倉町の川原の林等は貴重である。また渡町や笠田町にあるコゴメヤナギの巨木は木曾川では他にあまり見られない。これ等残り少ない大切なものを是非伐らないで保護してほしい。

## (3) 水生植物の保護

川に開まれて水に縁の深い川島町に水生植物が少ないのはどうしたことか。水生植物が多いのは木曾川の本流そのものでなく、それに附属する河跡湖、わんど、池、小川等である。河川工事でこれ等がなくなったり、たえあっても水の汚れ等が原因で少なくなったのである。鉄砲川と河跡湖については、1987年に調査したがその植生は貧弱であった。これは全国的な現象で、池の埋立、工場の廃水放流、農業の過度使用、家庭廃水の放流、孵化・飼育動物による被食等の影響で水生植物の衰退絶滅は憂慮にたえない。濃尾平野でかつて私が観察したものだけでも、長島町木曾川河口のムジモ、一宮市茂井町富田用水のウメバチモ、扶桑町や火口町の水脈のミズナラ、江南市富田の水田のデンジソウ、海部郡一帯のアカウキクサやオオアウキクサ、岐阜市折立の池のヒシモドキ等、絶滅したものが多く、貴重水草の衰退絶滅と反対に帰化水草の繁殖は年々著しくなっている。その代表者がコカナガモで濃尾平野でのこの水中にも見られる。川島町史の写真では鉄砲川に、帰化したホテイアオイが一杯見られるのに今では1株もない。このような状況は誠に残念で、水の汚れを出さなければ少なくして回復したいものである。貴重なものは保護しなければならぬが、どこにいても多量にあるものは別に保護しなくて

よいという考え方ががある。例えば町内にヨシやツルヨシの群落があるが、多くあるから破壊してもよいわけではない。川島町は水鳥の宝庫というが、これ等の群落は水鳥の生育に重要である。動物と植物、それ等をとりまく無機環境が互いに、持ちつ持たれつで関係で安定した生態系が保持出来るのである。

## (4) 川島町の天然記念物と保護樹

### 町指定天然記念物(2種)

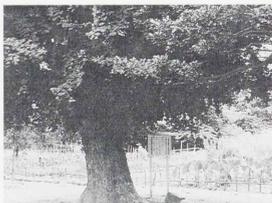
①クスノキ(クスノキ科) 北山町神明神社。  
幹囲2本あり南側280cm、北側268cm。現在環境庁によって地上140cmの所の幹囲300cm以上の樹木調査が行われているが、該当するものの中でクスノキが最も多い。この附近のものほとんどが植えられたもので、病虫害が少なく生育しやすく長命である。



天然記念物クスノキ

②イチョウ(イチョウ科) 松原町神明神社。  
幹囲315cm。雄樹でイチョウ特有の気根が出ている。これが乳房に似ているので母乳の出ない女性が願いをかけたという。中国には野生のものもあり、中生代から新生代の第三紀までに多くの種があった。まさに生きた化石である。花粉管内に精子が出来ることも有名である。雄樹から出た花粉は雄樹の若いさんなんに入り

花粉管になる。その中に精子が出るが、観察するのはむずかしい。私も花粉管までは見ていないが、動く精子はまだ見ていない。



天然記念物イチョウ

町指定保護樹(8種)

①アベマキ(ブナ科) 松原町秋葉神社。

幹囲220cm。隣の幼稚園との境にある。この附近の雑木林の主要木だから、多分自生木の残存であろう。この社はこのアベマキの下にマンリョウと、他にニセアカシアとサカキがあるだけで何とも淋しい。アベマキの花は8月に咲き翌年10月に成熟してどんぐりになる。どんぐりの皿には線状に長く伸びて背反する鱗片が多く着く。



保護樹アベマキ

②アラカシ(ブナ科) 笠田町北仙田野堤上。

幹囲180cm。樹高はそんなに高くないが遠方からでもよくわかる。伊勢神宮造宮に使う材木が20年ごとに本曾山中から木曾川を下って運ばれた。このアラカシのある所は、その御神木の立寄所といわれている。アラカシは最も普通に見られるカシで、この附近の照葉樹林の代表木である。どんぐりは落葉樹のアベマキやコナラと皿の形が異なる。カシでは皿の外側に鱗片が着いた数列の横の輪がある。



保護樹アラカシ

③ヒトツバタゴ(モクセイ科) 松倉町 豊田久次氏宅。幹囲100cm。ヒトツバタゴの苗をつくって葎草・愛知県内の学校に寄贈されている豊田氏には頭が下がる。ナンジャモンジャと俗



保護樹ヒトツバタゴ

称し、5月初旬に咲く純白の花は各地で観賞されている。葎草・愛知・長野県の本曾川・庄内川流域地方と遠く離れた長崎県対馬に自生が見られる。太田敬久氏の最近の調査によれば、雄樹と雌性花の樹ばかりで、雌樹は見つかっていない。

④サルスベリ(ミソハギ科) 渡町墓地。

幹囲150cm。中国原産で各地に栽植される。本樹は相当の古木で樹幹の西側が裂けてなくなっている。猿滑りとは木の肌がつつるしていて、サルも滑り落ちることから名付けられた。別名百目紅と称し、花期が長く百日間も紅色の花を咲かせるとの意である。葉の着き方には特徴があり、2枚ずつ互生するいわゆるコクスギ型葉序になっている。



保護樹サルスベリ

⑤キササゲ(ノウゼンカズラ科) 松原町神明神社。幹囲150cm。天然記念物のイチョウの東側にある。中国原産で各地に植えられ、キササゲのような果実が出るのでキササゲという。果実の中には、両端に糸状の毛のある種子が出る。果実は腎臓病の薬になる。この地方に植えられるものに、もう一種アメリカキササゲがある。これは北米原産で花はキササゲより大きくて美しい。



保護樹キササゲ

⑥エドヒガン(バラ科) 松倉町神明神社(小島のお宮)。幹囲170cm。通称ヒガンザクラというが、ヒガンザクラという和名のものが別にあるので、正式の和名のエドヒガンとする。別名をアズマヒガン、ウバヒガンとも呼ぶ。江戸



保護樹エドヒガン

彼岸、東彼岸は関東に多く彼岸の頃に咲くとの意だが、別に関東だけのものではなく全国に野生しました植えられる。8月末の葉の無い時期に咲き、姥(老婆)は歯が抜けて無歯が多いというので、葉無しと歯無しをかけてウバヒガンという。ソメイヨシノとは花のがく筒基部が急にふくれていること、ヒガンザクラとは花柱(め

しべの軸)が有毛(ヒガンザクラは無毛)の点で区別出来る。一宮市光明寺の桜にも本種が多い。

⑦シラカシ(ブナ科) 松倉町観音。

幹囲162cm。山地に自生するが庭にも植えられる。カシ類中最も寒さに耐え、暖帯林の北部から温帯林のかなり上部まで分布する。アラカシに比べて葉が細く鋸歯も小さいので、荒々しく感ずるアラカシより、全体にやさしい印象を与える。



保護樹シラカシ

⑧イロハモミジ(カエデ科) 松倉町観音。  
幹囲124cm。タカオモミジとも呼び、普通モ

ミジというのは本種で紅葉が美しい。「いろはにはへ」と葉の裂片7個を数えることから、この名がついた。樹齢100年と推定される。



保護樹イロハモミジ

### 13. おわりに

私が最初に川島町(当時は川島村)へ来たのは、1942年頃である。忘れることの出来ない嫌な思い出であるが、当時私は一宮市内に住む旧制中学の生徒であり野外教練で川島町まで行軍をした。戦争の為の訓練で今の徒歩の遠足とは全く違う厳しい内容である。現在の渡橋附近だが勿論まだ橋はなく南沢川を飯前上陸と称して服を着たまま渡らせられた。いくら浅い川でも中学生の身長では水中に胸までつかり、ずぶぬれのまま川島町へ入った。帰りは河田橋から一宮市内の学校まで、ぬれた服を我慢しながら軍歌をうたって帰った記憶がある。今から思うと何と馬鹿げたことをしていたのかとあきれが、軍国主義時代の行事ではこれ位のことは日常茶飯時であった。5万分の1の地図の岐阜と名古屋北部の2枚を買わされて、地図で渡町を仮想の敵軍の位置として読みとり、それを目標に向かった。国語の教科書で寺田寅彦先生の5万分の1の地図についての陸筆を習い、この地図に興味をもっていた。ところが最初の使用が戦争目的であり川島町が仮想敵国にされていたのである。以後40数年この地図は植物観察時の七つ道具として持ち歩き愛用している。やがて戦争も激しくなり一宮市で戦災にあい、浅井町へ疎開した。長かった戦争も終り東浅井の仮住いで数年を過ごしたが、隣町で近いので川島町へはよく出かけた。食糧は勿論のことすべての物が無い時代で、植物を調べ等の余裕は全くなかった。今日一日何を食べて生きるかという悲惨なその日暮しの生活であった。食べれる野草を摘み、主食のかわりになるどんぐりを拾い、唯一の蛋白質であるイナゴや川魚を探る為、浅井町や川島町を廻ったのである。昭和30年代になってやっと世の中も落ち着き、趣味として休日各

地を歩き、野生植物の名前を知りようになった。最近では特に本曾三川の川原を歩いているので、川島町へは時々立ち寄っている。

川島町は岐阜県でありながら、昭和30年代までは岐阜県側に橋がなく渡船に頼っていた。浅井町との間に木造の河田橋があっただけで、町内の旧制中学生徒も私と同じ一宮市へ通学していた。現在でも橋の数は8:1、バスの便数は2:1で、行政上は岐阜県だが愛知県側の方が便利である。その点他県の町という感じはなく同じ郷土として親しみを持っている。ふるさと史料館では、戦時中の生活の展示や食生活についての催しがよく行われているが、大変よいことだと思う。単なる懐古趣味だけでなく、戦争を知らない若い人や子供達に平和の有難さを知って貰うよい機会である。また平和な時代であるからこそ、この様な出版物をつくって載せ大変感謝している。

### 調査員(執筆者)紹介



佐藤 徳次

住 所 愛知県稲沢市島町1150  
愛知県自然環境保全審議会専門委員  
(元教員)

## あとがき

川島町は、都市近郊の町としては、数少ない緑豊かな自然が残り、数多くの植物が自生し、また、渡鳥などの野鳥の生息地として貴重な存在であります。

しかし、近年は、住宅建築や、宅地開発、河川の改修などがすすみ、自然が少しずつ失われていきつつあることは残念なことでございます。

そこで、今回、ふるさと川島の自然を現時点で見直してみようと、その一環として特に植物の生育実態調査を冊子に納めました。

この冊子は、植物学の専門家である佐藤徳次先生が、昭和63年度の1か年間、川島町の春夏秋冬の植物を足でつぶさに調査され、詳細な研究報告としてまとめてくださいましたものでございます。

住民の方々に、この冊子をご一読いただき、自然愛護や自然保護により深いご関心をお持ちいただき、住みよい町づくりのよすがになれば幸いと存じます。

最後にこの調査をお願いいたしました佐藤先生に厚くお礼を申し上げます。

平成元年8月

川島町ふるさと史料館職員一同

## 川島の植物

発行日 平成元年8月1日

発行所 川島町ふるさと史料館

所在地 岐阜県羽島郡川島町

松倉町1951-4

TEL(058689)2811

印刷所 關生印刷

